

【症例アンドリュー】 (男児 年齢:治療開始時6歳4ヶ月)

於・St.George's Hospital, Dept.of Child Psychiatry, Clare House
Blackshaw Road, London. SW17, ENGLAND

- ・主訴;全般に未熟。集中力に欠ける。学業成績の遅れ。学習意欲がない。友だちがつくれない。教師たちとの会話ができず、不従順になりがち。家庭内での問題行動としては、紙類(写真など)を切り刻む習癖。どんなに叱られても止めない。頭を壁に打ちつける。夜泣きあり。
- ・家族背景;ワーキングクラス。父親は、学業成績が芳しくなく、15歳から職を得た。GPO(郵便局)の電話交換手。夜勤。温厚な性格。生い立ち;13歳まで親たちと寝室を共にしていた。怪我がしょっちゅうであったとのこと、そのせいかアンドリューのこともひどく気を揉む。また、かつて自分が友だちとの折り合いはよくなかったので、息子が自分と同じようにいじめられることを恐れている。母親は専業主婦。攻撃的な性格。生い立ち;婚外子だった。祖父母に預けられ育つ。両親は後に結婚。父親とは陰悪な関係。怒りに任せ、ナイフを手に彼に向かって行ったこともあったとか。青年期頃に精神科受診あり。アンドリューの両親はどちらも太っていて、身なりをあまり気にしない。ごく質素な暮らし。三人家族が一つの狭い部屋に寝起きしている。どちらかという息苦しい雰囲気あり。父方の祖父母が下の階に住んでいて、子育てに協力してもらってきた。アンドリューは祖母にととてもなついている。母親は妊娠中ずうっと具合が悪かった。出産後、膣感染症を患う。アンドリューに対して母親は過剰に保護的。同時に、思う通りにならないと彼に対して侮蔑や厭味を言うやら無視したりで、苛立ちを隠さ^{すく}ない。うるさく小言を言う。じっとしていろとか、ちゃんと話しなさいとやら。それに対して彼は身を竦^{すく}めるが、すぐに悪さを始める。アンドリューは母親に抱きつくことが好きだが、落ち着きが悪く、母子は穏やかな関係を保てない。母親は彼を‘ペスト(厄介者)’呼ばわりする。いい母親になろうとする気持ちは充分にあるものの、かなりの困難を抱えている。悪さを懲らしめる際には、父親がアンドリューを両手で抱え、母親が彼の尻をスリッパで叩くのだとか。尚、母親はアンドリューの治療と並行して、PSWとの「親面談」が継続された。
- ・生育歴;授乳は、母乳の吸いつきが悪く、6週間で哺乳瓶に切り替えられた。生後3ヶ月でオマルのトレーニング開始。12ヶ月目から歩行。日中オムツが取れたのは2歳。3歳半までには夜間のオムツは要らなくなる。排泄の問題はなかった。生後18ヶ月目に10日間入院(指を扉に挟んだため)。4歳半で入学。当初は学校が好き。学習には意欲があった。入学前から紙類を無差別に切り刻むやら、頭を壁に打ち当てるなど問題行動あり。風邪をひきやすい。鼻炎・アデノイド。5歳半の折、扁桃摘出(部分的)手術をした。一人っ子。
- ・学校の担任からのレポート(1976/01/14);友だちがつくれない。ひどく気に入られたがるものの、他の子どもが彼を拒む。「現実」と「空想」との違いがよくわからないようだ。どちらかという「空想の世界」に浸っている。読解力はごく幼児の段階。学習に対してやる気はあるものの、周りからのサポートを大いに要する。心配性で、いちいち何にでもこだわり、やきもきする。全般に集中力に欠く。クラス内でそわそわと落ち着かず、うろつき周る。それで、クラスの雰囲気を落ち

着かないものになっている。物語について問われた際に何かコメントしようとするが、まともなことが言えない。質問されていることがよく飲み込めず、それで応えられないようだ。理解力に問題があり、会話を維持できない。コミュニケーション能力に問題あり。彼の話し方は幼稚なまま。彼の動作・身振りは、しばしば変てこで、ぎこちない。

・心理テストの結果(概括); WISC.総合評価 IQ 101

言語性評価 IQ104

動作性評価 IQ97

Schonell Grade Word Reading Test=R. A. =5歳2ヶ月

Expected Reading Age;Fransella &Levner regression=6歳3ヶ月

[※所見;テスト中そわそわして、終始落ち着かない。注意散漫。後半では、いくらか敢えて不従順になりがちであった。励ましやら褒められることがたくさん必要。そうでないとすぐに退屈する。赤ちゃんっぽい。全然関係のないおしゃべりが多い。全般的印象として、与えられた課題はおそらく彼にはさっぱり飲み込めないものであったようにうかがわれる。]

・印象;ちょっと太めの小柄な男の子。青白い顔色で緊張を帯びた面持ち。

・治療過程;分析期間は2年3ヶ月(開始;1976/05/14~終了;1978/08/04)。

週1回のセッションから始まり、1977年2月11日以降週3回のセッションとなった。

■資料その1;アンドリューの治療についての臨床レポート (日付;1976年7月28日)

わたしはアンドリューに5月14日以降会っている。彼はなかなか興味深い男の子だ。彼の頭の中はまるで‘ゴミ溜め’とも言えた。いろんなところから、例えばコミックとかテレビの番組で見たりしたものから拾い集めたあれこれが散漫にごっそり詰まっているかのようなのだ。当初から、わたし自身が‘ゴミ箱’に感じられた。彼が語るところの支離滅裂で混沌とした‘悪ふざけ’のナンセンスをごっそり抱えなくてはならないわけで…。だが、しばらくしてから、まもなくそれが、わたしを‘迫害者’もしくは何らかの秘密を暴こうとする‘探偵’に見立て、そうした妄想的迫害不安から己の身を庇い、糾弾されることを回避せんとして‘証拠隠滅’を企てるやら、彼なりにあれやこれやわたしに対して懐柔策をこうじてもいるらしいと分かってきた。それは、日頃から母親との関係において彼の身に付いたところのものであろう。つまりのところ、はぐらかし、宥めすかし、そして猫かぶりといったあの手この手の‘策略’ということ。やがて彼の“ごっそり溢れんばかりの資料の幾つかが了解され始めた。それは、彼の内的なありようinterplayについて或る「真実」が語られていたように思う。彼は、こうした支離滅裂のごちゃごちゃの破片を吐き散らすことで、そこに彼自身のなかでは抱えきれない‘悪なるもの’を投影していたのだ。だからこそ彼は、わたしの注意を意図的かつすばやく逸らす必要があったともいえよう。わたしにその「真実」をすっかり解られる前に、そしてまた彼自身がその内なる脅威そして罪障感から逃げるためにも…。これこそが彼の主要な問題領域である。こうしてわたしが「おちゃらけ鳥(mocking-bird)」と呼ぶところのアンドリューは、「理解されたい」にも「理解したい」にも意図的に敢然と抗っていた。或る意味、彼は芸達者な‘ピエロ’でもあった!このように、



彼は対象との満足的な取り入れ的關係性(introjective relationship)を築くことが出来ずにいたとうかがわれる。

これまでのセラピーセッションについて言うならば、この2、3週間に於いて、彼にかなりの進展がうかがわれた。彼は自らのアイデアとか考えていることをあれこれとわたしに率直に語り始めたし、わたしが語り掛ける解釈にも反応するようになっていった。彼は、わたしが語ったことを素早くキャッチし、それで空想したことをさらにあれこれ頭を捻り考える。もしくは、彼はわたしの語ったことを面白がることもあり、でも時には批判的な態度を取り、逆らうこともあった。それで、＜先生の言うこと、間違っている＞とか＜そんなの、でたらめだあ(That's rubbish)＞とか、＜フン、かまうもんか I don't care＞と言うこともありました。

全体に見て、彼がわたしの理解しようとする姿勢になじんでゆくなかで、明らかに彼自身の内的感情(inner feelings)を経験する能力、言い換えれば内側の心の痛み(psychic pains)をこらえる耐性がいくらか育っていったものとうかがわれる。彼の遊戯のなかで例証された空想とは、例えばこんな具合。彼は、自分が父親の座を奪い取り、それでわたし(転移上の母親)に向けてどんなに大きいかどんなに力強いかを誇示し、印象づけようと躍起になるのです。 (例えば、口髭をつけたアンドリューだったり(1976/07/9)、それからテレビ番組に出てくる「スティーブ・オースティン(the six-million dollar man)」みたいに自分は速く走れるとやらジャンプが出来るとやら、これみよがしに…。また、彼はわたしに食べ物をとらせたり、飲み物を与えたりすることを非常に喜び、こっそり秘密の快感を味わうようでありました。それはちょっと性的誘惑的(seductive)な感じがかり、言うなれば、両親が彼らだけでいるときにこっそりやっている、そのように彼は想像しているかのようでした。

とにかくにも、彼の頭の中は、「母親のからだ(mother's body)」に対しての強烈な占有欲貪欲性および嫉妬心といったものでいっぱいだったようです。セッションの中で、折りに触れて、彼はパラノイド(偏執症的)な疑惑を、‘他の子どもたち’もしくはわたしの‘夫’(ダディ)・Mr. Yamagamiに対して示すことができました。自分がいない間に彼らがわたしたちの部屋に入り込んでくるということを想像していたのです。彼は室内のどんな変化も見逃しません。例えば、テーブルやら椅子の配置がちょっとでも違ったりしますと目敏く察知します。そして、もしもテーブルにわずかなクレヨン(黄色)の跡でも残っていたりしますと、すぐさまそれを誰かが彼の前に居たことの証拠とし、それでひどく気分を害するわけです。怒って、自分の箱の中の何が無いだの、それで誰かが盗んだとか、言いがかりを付けるのです。つまりは被害妄想なわけです。彼は、実際に外の物音、誰かの話し声にはひどく敏感でありました。特にどんな意味もなかったにしろ、単純にそれは誰かが部屋の扉に近づき、そして押し入ってきて、彼を追い出すといったことを意味(暗示)したわけです。その‘誰か’とは、まずは彼がいうところの「Mr. Clock(ミスター・時計)」であります。わたしが＜お時間は終わりよ(Time is up)＞と告げるとき、彼は、その「ミスター・時計」がやってきて、わたしを取り戻し、そして彼を追い払ってしまうように感じたのでしょう。絶望のなかで彼はこれを意識し、そしてわたし(転移上の母親)が絶えず彼の影響下にあるともいえ

ない、そしてわたしの居たり居なくなったりを自由気儘に操作などできないといったことに気づかされ、そのフラストレーション、苦々しい憤怒、敵愾心、そして苛烈な嫉妬心が湧き上がり、そこからその矛先はわたしのからだの‘内側’へと向けられるのです。そこにはわたしが何かとてもいいものを抱え持っている、でもそれは彼には与えようとしない、もしくは与えるにしてもほんのちょっぴりといった具合でしかないといったふうに、狂おしくも疑心暗鬼となるわけです。こうして彼のこころの内、わたしは鍵が掛かっていて開けられない「宝物屋敷」の‘魔女’に変身するわけです。こうした空想と関連があると思われるのは、或る日実際に「ドル・ハウス doll-house」の中へ彼が首を突っ込んだことです。恰も彼は母親のからだの‘内側’へと侵入せんと躍起になっているかのようでした。‘押し込み強盗’みたいに・・。でも、やはり到底無理だといったことでした(1976/07/02)！

それで彼はその腹いせにでしょうか、わたしが内側に秘めていると想像したものに頻りにケチをつけます。バカみたいだとか、汚いとか、ゴミでしかないだとか・・。実際のところ、「宝物屋敷 treasure house」やら「ドリンク・マシーン」と想像したところのわたし(転移上、母親)の‘内側 inside’に、‘塵芥^{ちりあくた} dirt’やら‘雪’などを投げ込んで、すっかり‘トイレ’状態にしてしまうのは、誰でもない、彼なのです。この彼の秘密裏の報復、その攻撃の結果として、母親から自分が実際に得るものが何か、もしくはそれはいいものか悪いものか、ひどく混乱してしまうといったことになりがちです。彼は、自分が賞味期限の切れた、ひどくまずくて飲めないような‘冷たいミルク’を与えられるのではないか、もしくはその飲み物はただの‘オシッコ’なのではないかと恐れるわけです。事実、彼はその遊戯において、水をオモチャの便器に流し入れ、そしてゲラゲラ笑いながら＜オシッコ！＞と言って、その水を啜ります。その後で、彼はわたしに同じようにそれを飲むようにと説得にかかります。＜汚くはないからね。水だよ、飲んで・・＞と不安げにわたしに(というより彼自身ということになりますが)安心させようとするのです。このような心の内なる混迷、そして‘良いもの’と‘悪いもの’の判別がつかないといったことから、また彼自らの投影同一化の結果とし、母親の心身の安全さ・健やかさがひどく脆くそして怪しげなものになるわけです。例えば彼の空想においては、母親は‘靴’を食べたり‘眼鏡’を食べたりするのです！そうですから、彼の心の内では、母親が安全で、健全で、そして良きものであり、それでいろんな良いものが備わっているものとはどうしても思えず、彼の妄想的迫害感は募るばかりなのでした。勿論、これらすべてが「おちゃらけ鳥 mocking-bird・アンドリュー」の為せる業で、紛れもなく確信犯的であるわけで、言うなれば、自ら仕掛けた‘罠^{わな}’に自らが嵌ったといったところでしょう。

上記に例証されたところの彼の空想と並行して、彼の可能な‘ライバル’であるところの誰か、ダディ(もしくはわたしの‘夫’であるMr. Yamagami)もしくは他の子どもたちに対しての嫉妬心やら敵愾心を含んだ空想が語られます。彼が思うに、彼らは母親(もしくはMiss Yamagami)から自分がもらえるものよりもっとたくさんものを貰っているといったわけです。そこで彼は、故意に彼らを戯画化し、馬鹿げたシロモノにしてしまうのです。宝物(金、食べ物そして飲み物)を盗むやら、それで追跡されたり、それでメチャメチャにトイレっぽい攻撃(例えば爆弾で粉碎されとか、泥の水たまりの中で溺れるとやら、もしくは雪の深くに埋められて、そして凍死してしまうといったこと)に身を晒されるといったわけです。

彼らは、馬鹿げたおしゃべりをしてゲタゲタ笑うやら、互いに嘲^{あざけ}っては足の引っ張り合いをするわけですが、事が深刻になると喧嘩となり、叩くやら蹴るやら、もしくは刺し殺すといったことにもなるわけです。こうした格闘シーンは、大概ぶつぶつ意味不明の言葉が添えられます。それで何が起きているのかわたしには皆目解らないことが多いのです。例えば、「バットマンとロビン」についてですが、その物語においてそもそも彼らは共通の敵に向かって同盟を結んでいる相棒なわけですが、だがすぐに何の理由もなしに突如彼らは互いに蹴るやら殴るやらを始め、このようにキャラクターが一刻一刻変化するのです。彼の相手する相手が誰であれ、たとえ仲間であっても、「信義」、つまり誠実とか真面目であることは「おちゃらけ鳥 mocking-bird」のアンドリューにとって何かしらひどく落ち着かないもののようです。‘真面目’は簡単に‘不真面目’になり、‘誠実’は得てして‘不実’に陥りがちであります。どのような友愛も、彼の内に巣食う不信感やら敵愾心で大揺れとなり、維持されません。こうしたことはおそらく彼が、学校でクラスメートから好かれたい、友達になってもらいたいとどんなに熾烈に望んでいたとしても、現実には他のどの子からも嫌われ拒まれてしまうのはなぜか、そこら辺の事情が理解されるものと思われる。さらには、彼の圧倒されるほどの不安感というのは、どうやら父親のMr. R がひどい歯痛で苦しんでいた時期に深まっていったようです。それはダディ(父親)に対するアンドリュー自身の空想された秘密裏の攻撃ということが想定され、それがためにダディに報復されるといった、迫害的妄想に大いに起因しているように思われます(事実それら空想は、実に口唇愛的サディズムを加味しているといえましょうから...)。このようにアンドリューは独りで空回りしながら、七転八倒の苦しみであがいているわけです！

「夏季ホリデー」がすぐに近付いてまいりました。彼のわたし(転移上の母親)との分離についての不安はかなり熾烈でありました。彼は「スパイダー・マン」みたいになって、わたしを‘蜘蛛の糸’で捕まえ、がんじがらめにし、そして彼の城へとわたしを攫^{さら}ってゆき閉じ込め、他の誰をも締め出すつもりでいたわけです。遊戯中、彼は男性人形に報復的な攻撃を仕掛けております。それは、おそらく彼のこころの内ではダディみたいな誰かであって、それはわたしとホリデーの期間一緒にいる人ということになりましょう。彼の遊戯で起こったことというのは、一人の男が馬に乗っており、しばらくそのまま駆けていたわけですが、



落馬してしまいます。それで地面にからだを打ちつけ、あえなく息絶えたということ。馬は撃たれて死にます。そして、それから動物たちの間にてんやわんやの騒ぎが起こり、乱闘が続きます。ほんとうのところ、こうした惨劇は彼が想像したところの‘わたしの家族’に対して、彼の怒りおよび嫉妬心がもたらしたものであったといえましょう。ところがこの遊戯の後、すぐに、彼は「誕生日カード」を作りました。そこには「或る人へ(To man)」と書かれてありました(1976/07/23; 図例)。そしてそのカードの表には(幼い女の子、小さな亀そして小さな猫)の絵が描かれてありました。それは少なくとも、或るひと(ダディ)をわたしと一緒に居させてあげ、そして‘新しい赤ちゃんたち’がわたし(転移上の母親)に授けられるためにも、彼がわたしをしばし断念しようとする努力であったとも言えましょう。

アンドリューについては、時にその「償^{つくな}い(reparative work)」において奮闘するさまがわたしを驚かせ、感動させることがあります。彼が母親の‘内側 inside’に自らが為したことの罪障感をどうにか克服した

あとで、彼はそれらすべてを元通りにする仕事に懸命に力を注ぎます。彼はセッション中に母親に、そしてわたしにも、たくさんの‘贈り物’をせせと作りました。紙飛行機、ネックレス、もしくは腕輪、紙袋（そこには色鮮やかな丸い点々で美しく飾られてありましたが）、それから紙の紙幣のいっぱい入った紙のお財布といったところです。このようなことをし遂げますと、彼は大いに安堵やら満足感を覚えるようでありました。単純に、こうすることで彼には母親を（Miss Yamagami もまたそうだと、彼が言いました）良きもの、美しいモノ、豊かなものに出る感じられたわけです。そうすることが唯一、彼が良い子であり、可愛い子であることが出来て、それで母親は彼を愛してくれるということになりましょう。本当にそのように信じられたらいいのですが…。母親の健全さというのは彼自身のその‘映し鏡’のようでもあり、その逆もまた真なりとも言えましょう。セラピイの資料が示すところでは、アンドリューの母親への‘思いやり concerns’が幾らかなりとも育まれてゆくように思われますので、今後の治療に期待できそうにもうかがわれます。勿論疑いもなく、彼は極めて深刻に混乱を来している子どもであると言えますし、そうした混乱をどうにか整理できるには今後かなりの時間が必要とされるかと思われますけれども…。

Chizuko Yamagami

(Child Psychotherapist)

■資料その2; アンドリューについての覚え書き

(日付; 1977年2月10日)

アンドリューの抱える主要な問題点としては、母親の胎内、その‘内側’を巡ってとことんそれを自らのコントロール下に置き、かつ好き放題に横暴を極めるといった独占欲および小児性万能感 the infantile omnipotence を断念できず、そこに執拗にしがみついていることが挙げられましょう。例えば、その空想において、彼は‘ゴールキーパー’になったり、もしくは‘警備員 guard’になります。母親に近づく何人たりとも退けるためです。それは彼だけが管理していいのであって、他の誰にもその権限を譲るつもりは断じてないのです。どのような状況にあっても、彼が何かしら疑惑を抱いて内心脅かされているとき、もしくは事実確かに他の誰かが母親を占有していると気づかれるとき、彼は自分が押し出されて疎んじられていると感じるわけです。こうしたフラストレーションが嵩じ、そこで彼の空想レベルに於いて、暴力的な紛争場面が勃発します。彼の爆発的な憤怒、敵意、そして嫉妬心で‘内なる母親’は戦場と化すわけです。さらには口唇愛的及び肛門愛的攻撃にひたすら彼に没頭している間に、それはとんでもない惨事に遭うことを余儀なくされるわけであります。貪り食われるやら、爆弾を浴びせかけられるやら、そして焼き尽くされるやら…といったことです。さらには、彼の敵となる誰か、それがダディだったり、もしくは他の子どもでも、母親を横取りするものである以上、どんなことをしても痛い目に遭わせずにはすまないわけです。彼らは痛烈な^{あざけ}嘲り、そして皮肉やら揚げ足取りといった甚だしい攻撃に晒されねばならない羽目になります。卑しめられ^{おとし}貶められるといったこと…。それはそもそも彼自身の憎悪、嫉妬心、そして羨望から惹起されたものであるわけですが…。彼はこの点でかなり挑発的で闘争的です。死に物狂いといったふうです。まるで、「負け」は死を意味するといったみたいに…。だが、このことが、彼に大なる罪障感を、そして迫害不安を惹き起こすことになるのです。それは彼が彼の

愛する対象 (love-object)、つまりのところ母親イメージなわけですが、に対して自らが為したと彼が信じるところの破壊および損傷のゆえであります。さらには、‘悪なる母親及び父親’の結束されたイメージ (the combined objects) によって報復的な攻撃を我が身に受けることを心底恐怖することになるのです。彼の遊戯のなかで見る限り、外的現実として起こるどのような些細な事柄も、例えば父親の病気とか事故、もしくは彼の乳歯が抜けたといった事実でも、そうした彼の妄想的迫害感が事実として確認された‘証拠’と見做され、さらにそれが活性化されてゆくようでした。またそれは、ごく簡単に彼の内なる不安状況をいっそう悪化させることになるといったことのようにあります。

セッションの中での「転移」を‘徹底操作 work-through’するにつれ、彼は、セッションの合い間に‘不在のMiss Yamagami’になっているわたしを、その欲求不満のせいで惹起される破壊的攻撃性から‘良き母親イメージ’として保持せんとし必死に葛藤していたことになります。そして彼とわたしとの間の絆(つながり)を保とうといっそう努力を尽くしたといえましょう。それは彼の遊戯の中で、「レディ・カイト/ 凼 lady kite」を紙で作ったり(1976/10/29; 図例)、一つの線で繋がれた2つの‘電話’とか‘トランシーバー’を作るなど、といったことにもはっきりと表れております。彼はまた、‘望遠鏡’もしくは‘双眼鏡’で自ら装備し、それで‘不在のMiss Yamagami’の行方を追おうとしたということがありました



(1976/12/17)。それはわたしがたとえ今は不在であってもどこかで生きており、いずれまたその時が来れば戻ってくるといったことのようにです。このことは、対象との「距離」を巡ってのフラストレーションに耐える能力が幾らか育まれてきていることを証しているといえましょうし、その内的対象が彼の口唇愛的食欲さ、および肛門愛的破壊性の犠牲になることがさほどではなくなっているということを意味するかと思われます。しかしながら、こうした彼の内に育まれた、愛する良き母親イメージを信頼する気持ちは、ホリデーのお休みとなり、セッションの中断、そしてわたしの長き不在といったことがありますと、簡単にくつがえされてしまうわけ

です。もしくは、彼の誕生日にわたしが何も贈り物を用意していなかったといったことでも大いに心揺らいでしまうわけです。この時点で、彼の怒りは爆発し、またまた内なる苛烈な不安状況、迫害やら強奪、殺人そして爆撃といったスッタモンダの狂乱の渦に引きずり込まれてしまうわけです。

学校でのアンドリュウの問題というのは、まずは学習困難であり、そして概して落ち着きがなく、未熟な振る舞いが目立つといったところなのですが、それらはすべて、外界及び外的人物に対しての理解が絶え間なく彼の空想によって影響され、殊にはそれがサディズムの彩りを帯びることによっていっそう混乱をきたしているといったことが大きく原因として考えられましょう。彼の治療は、外界現実および内なる心的現実を区別する能力が可能なかぎり目指されており、それが究極には彼の健全な自我機能を育むものと期待されましょう。これから近日中に、治療は週3回のセッションになる予定ですので、いっその‘徹底操作・ワークスルー’が取り組まれてゆくものと考えております。

Chizuko Yamagami
(Child Psychotherapist)

■ 資料その3;アンドリューの治療経過についての総括的臨床レポート

(日付;1978年11月30日)

この症例は、St. George's Hospital, the Department of Child Psychiatry (London, Tooting) に E. W. O.を通して紹介されてきました(1976/03/29)。

アンドリューは、ワーキングクラスの家庭の一人っ子であり、セラピー開始の当初は6歳になったばかりでした。ちょっと顔色の悪い感じですが、丸っこいポチャとした男の子です。何かひどく不安げで、その振る舞いもぎこちない印象がありました。彼の父親は28歳で、GPO(郵便局)で電話交換手をしております。夜勤です。そして母親は26歳で、専業主婦です。彼らはどちらも太めで、堅苦しい雰囲気、身なりにもあまり気遣わないといったふうです。どちらかというと言えない印象です。父方の祖父母が住んでいる上の階に住んでおります。彼らは玄関口の大きな表の部屋を使おうとせず、奥まった狭い一部屋を日常的に生活空間にしております。そこには小さいながらもキッチンがありまして、そこを寝室として彼ら3人は一緒に寝ていたわけなのです。(それは1977年の夏までのことですが...) 家族の雰囲気は全体に抑制的です。アンドリューに対して絶えず両親は怒鳴りまくっております。ちゃんと立ちなさいとか、そわそわしないのとか、きちんと話さないとか、ガミガミ小言が絶えません。その度に自意識を募らせて身を縮めたりするものの、彼は性懲りなく「悪さ」を繰り返すといったことになるようです。それが日常茶飯事でしたから、母親は躊躇なく彼を「ペスト(厄介者)」呼ばわりします。あからさまに敵意を露わにし、アンドリューが紙類を手当たり次第に切り裂くことを訴えます。それも夜間に親の眼を盗んでこっそりと...。殊に家族写真がその被害にあったことを苦々しく憎悪を込めて語りました。それにしよっちゅう抱っこを求めてきたり、それでも母親の膝の上にじっとおとなしくしていられず、つい母親がカンしゃくを起こすことになるとか。また、ベッドタイム(就寝時)に寝ないで部屋中をうろつき回るといったことについても苦情をこぼします。

母親は一人っ子で、婚外子でありました。そしてロンドンのEast-End地域で、実母と共に祖父母の庇護の下に育ちました。彼女は彼らにとっても懐いていたようです。その後彼女が9歳か10歳になりましたとき両親は結婚し、父親が同居することになったわけです。その彼とは全然ウマが合いませんで、毛嫌いしていたようです。そして或る時などは、何かの拍子に彼女は怒り狂って、カービング・ナイフを手にし、父親に向かっていったというエピソードが語られております。一見して彼女は青年期以降、困難な時期を迎えたようでした。14歳から16歳まで或る精神科医療サービスを受診しております。一般的に何に対してであれ、彼女はとても攻撃的な態度を取るようであります。そして彼女はアンドリューに対して「コンテインメント」の機能をしているとはとても言い難く、どちらかといえば絶えずあら探しをするばかりで、何かというと懲罰的に出ることが多いようです。しかしながら、いい母親になりたいといった願望はかなり強いようで、時折アンドリューに対して息苦しいほどの愛情を露わにすることがあります。例えば、彼女が語ったところでは、<もしも夫がアンドリューを何かしら傷つけるようなことがあれば、わたしは彼を生かしておかないわ! >とやら...

父親は、また同じく一人っ子です。どうやらごく普通の生い立ちといえましょうが、学校の成績は芳しくなかったようで、それはしばしば些細な病気やら事故に見舞われることがあったからのようです。ですが、現在の職については自分はハッピーだと語っております。彼は寡黙で、大概のところちょっと打解けないよそよそしさがあります。奥さんの尻に敷かれているといったふうで、面接中も妻の主導に任せて、あまり発言はしておりません。そして、どうやら彼は初めての男の子の存在に圧倒されがちであるのではないかといったことを感じさせられました。つまり潜在的な自分の‘ライバル’として…。そして彼自らの不器用で無力だった幼児期の感情やら、かつて彼がクラスメートの子どもらに対して覚えたところの対抗心とか迫害感情なども未解決のままにアンドリューに投影し、その結果やたらと彼に制約を課す傾向があるようにうかがわれました。それでいてどうやらアンドリューに堅固な安心できる枠組みを設けてやるとか、適切な方向付けをしてやるといったことができずにいるようでした。そうであっても、彼は父親として息子に対して真正ともいえる、ぬくもりの感じられる優しさを表出します。そしてアンドリューにとっていい父親になろうとも願っているようでありました。

尚、両親は、社交面でその交遊範囲はごくごく狭いといえましょう。父方の祖父母は別として、隣近所との付き合いも乏しいようです。そしてアンドリューが4歳半になって学校に入学するまで、彼は他の子どもらと混じって遊ぶといったことはまるでなかったようです。

学校からのレポート(1976/01/14)によりますと、アンドリューは学習が著しく停滞ぎみであるとのことでした。一向に進歩が見られない。集中力がいたって欠けている。他の子どもらは彼を嫌って避けてしまう。そしてそのことでアンドリューは苛立って、事ある毎に些細なことで大騒ぎをしでかす。彼はクラス内で落ち着かない雰囲気をつくっている。子どもらの間をあっちこっち飛び回ったり、一つのことに集中できず、すぐに別のことに気が散るといった具合。例えば物語を聞いて、どんなことを感じたか問われても、彼はコメントすることがひどく難しい。大したこともいえず、言えたとしても的の外れたことしか言えない。理解力に困難があり、だから質問されていることに正しく応答することが難しい。彼の話し方は依然として幼稚なまま。彼の動作・身振りはしばしば変てこで奇妙であるといったこと。

※補記; アンドリューの治療開始は、1976年5月14日。週1回のセッションで始めました。それから1977年2月11日以降、セッションが週3回に増やされます。その理由は私側の事情でもありました。すなわち、この症例が「タヴィストック」コースでの私の「トレーニング・ケース」として適当と判断され、病院側からも了解を得たということ。Mrs. マーサ・ハリスからプライベート・スーパービジョンを受けております。治療終結は、1978年8月4日です。この間、アンドリューのセッションと並行して、母親もまたPSWから定期的なコンサルテーションを受けております。父親もまた、或る時期来所されておりました。尚、この「総括レポート」は、資格認定のために「タヴィストック」に提出されたものであります。

【心理治療の過程】

2年3ヶ月ほどの歳月アンドリューと共にしながら、彼のその内なる世界に密着して寄り添い、それでようやく了解できたのは、実に彼の成長を疎外しているものがごく最早期の「母親オッパイ」との関係に遡るということでした。授乳についての母親の説明は次のようです。母乳は2週間で涸れてしまった。アンドリューは自分から乳首を咥えて吸うということが決して長続きしなかった。すぐに口から乳首を離して、顔を背けてしまう。そして6週間で哺乳瓶に切り替えられたということ。そして次第にセッションのなかでわたしの知るところとなった、アンドリューの甚だしい妄想的迫害感、そしてシニズムとか^{あざけ}嘲りの入り混じった、躁的防衛的性格のいくらかには、このしっくりゆかなかった「母親オッパイ」との相互的關係づけが刻印されているのではなかろうか。すなわち「反復強迫」ということになりましょう。振り返りますと、その「母親オッパイ」とのアンドリューの関わりの実態がいかなるものであったのか、治療の転移状況において、その対象関係パターンが克明に紐解かれていったものと考えられます。

しかしながら、それがアンドリューの実態だとしても、それと背中合わせに母親の‘病理’がありそうです。彼女はアンドリューに対して日常的にうるさく小言を言うことがあるのですが、そこには第一子との報われなかった授乳体験が、そもそも自信があったとはいえない、彼女の女性性もしくは母性というもののプライド(そして自己愛)を痛く傷つけたということがありはしないかと想像されます。その後の彼との関係性においても、そうした母親が引き摺っていた抑うつ的な痛みがいつそう強化されていったということがあるように思われます。つまりのところ、＜どうしてもこの子はわたしの言うことを聞いてくれない。なんでわたしを‘いい母親’にしてくれないのか・・・＞といった恨みがましい気分であります。自らの隠された抑うつ感を居丈高になって敢えて攻撃的になることによって、その内なる鬱憤を‘ガス抜きする’といったこと。ここにどうやら‘男根的特性 phallic quality’がうかがわれます。或る意味、アンドリューは彼女にとって恰好の‘コンテナ’であったともいえます。しかしながら、子育てが彼女にとってもう一つの痛恨事となったとき、彼女は生涯をとおして抱えていた己のさまざまな片付かない思いを息子アンドリューに投げ込むこと(投影同一化)で、己の傷ついた人生にしっぺ返しをせざるを得なかったのではないか。いつかは「生きられる現実」へと導かれることを、そしてどうにか人生に報われたいと願いながらも…。事実、彼女は赤子のアンドリューをどれほど愛おしく思ったことか！ 或る意味、アンドリューは真に彼女の‘頼みの綱’でもあったのです。やがていつしか治療経過に伴い、彼らの関係が穏やかになった頃にですが、時折窓の外からアンドリューの＜マミー！速く速く！（Hurry up）＞と叫ぶ声が聞えることがありました。いつの間にか彼が彼女をリードしている！あの一筋縄ではゆかない母親を・・・とわたしは内心想ったものです！予約時間に遅れまいとして、バス停から病院の受付へと彼は必死に駆ける。その後姿を懸命に小走りで追う母親の姿が目に見えます。そんなふうに通い続けた2年余りでした。そして治療終結時には、彼女の強張った‘殻’がいくらか弾けたようで、リラックスした穏やかな笑顔が戻ってありました。

彼のセッションをとおして、転移状況のあれこれを拾い集めて再構成してみると、「母親オッパイ」に向けて彼が抱えもつ熾烈な不満感そして不信感、また逆上するほどの‘妨害された’といった憤りの

感情に対してどうにかして「コンテインメント」を探しているようすが見て取れます。そして同時に彼は、糞便とか尿に対しての自己愛的固執をどうにか断ち切れるように、迷い^{つまず}躓きながらも格闘していたのであります。つまりのところ、この「肛門愛的(及び尿道愛的)サディズム」こそが、その過剰な投影同一化がゆえに彼の心の中では「母親オッパイ」＝「母親・お尻(ボトム)」とも同一視され、大きな混乱を来たしていたところの根源なのであります。それはまた、彼の「去勢不安」とも並行しており、それは外的な事実、例えば彼が誕生3ヶ月目でオマルに座らせられ排泄訓練が始まったということ、そしてその後18ヶ月で指を扉に挟めて怪我をし、入院したこと、そして5歳半の折に扁桃腺摘出手術をしたこと、そうしたそれぞれがその一因としても考えられなくもないでしょう。

そしてセラピー過程を一言で述べれば、かつての失意で彩られ、恨みを残したアンドリューの「離乳」の再体験であったといえましょう。真実そこで展開された内的ドラマの多くが物語っているのは、彼の心的苦闘が、やがて徐々に「かつて見失われた母親オッパイ once-begone-breast-mother」が彼の内なる心のスペースにおいて蘇り(resurrection)、再発見される方向へと向けられていったということであり、それが鮮やかに明るみにされたものといえましょう。

※第一段階；(1976/05/1～1977/02/18)

ごく最初の頃からその遊戯資料において表れていると思われるのは、「赤ちゃん・アンドリュー」にとって、授乳する乳首を口に咥え、吸おうとしているとき、その乳首は彼の口には1つだけしかありません。でも「母親オッパイ」はその‘内側’に他にももっと別の乳首を押し隠し、与えまいとしているといったことです。それは疑惑というか、もう確信めいたものであり、それが彼の頭にこびりついて離れないようなのです。アンドリューの熾烈な食欲さがもたらす「母親オッパイ」への羨望 envy であることは間違いないでしょうが、この「出し惜しみする grudging 母親オッパイ」に対する際限ない渴望、そしてフラストレーションによる失望・落胆、そして怨恨、さらには敵対感情を募らせ、意趣返しを目論むといったことがアンドリューの主なる心的風景であります。

例えば、彼のこころの内で「ドリンク・マシン・ボックス(自動販売機)」を思い描きます。その中にはたくさんの飲み物の瓶が入っているわけです。そして彼は懸命にそこに潜入せんと願うわけです。そしてありったけ一度に全部を奪わんとするわけです。例えば(1976/07/02)、彼は「ドル・ハウス」の中へと頭を突っ込み、＜ドリンク・マシン・・＞と呟きました。ちょっと恍惚としたふうに・・。しかしながら、こうした「母親オッパイ」の内側にこっそりといかにも魔法めいたふうに押し入ること、それはつまりのところ彼の‘内的対象’には皮膚・境界がないということになりますので(妄想的同一化)、ついには「閉所恐怖症」で終わるしかないようです。「ドリンク・マシン」について語りながら、こんなふうにアンドリューは呟くのです。＜押し入ったはいいいけど、ぼく、出られなくなっちゃった！ぼく、冷たい飲み物、いやなんだ。腐ってるもん・・＞といったふうに・・。これは母親のからだのトップとボトムといった、その垂直的混乱。さらには、「乳首＝尿を排出するペニス」、それから「ミルク＝尿」といったことの混乱に由縁するものと考えられます。ここでこれとの関連で一つ、学校の担任からの報告にあったことが想起されます。彼は学校でスイミング

の時間にパニックになり、ひどく騒ぎ立てるんだそうです。プールの水の中へと梯子を下りてゆくことを極度に嫌がるといったこと。そこには、もしかしたらこうした妄想的迫害感が背景にあるかと思われます。

セッション中しばしば気付かされたことなのですが、彼はセラピールームの外から漏れ聞えるどんなに小さな物音にもひどく敏感であり、そして簡単に迫害意識を抱くのでありました。これは彼自身の‘泥棒’の部分分割排除されかつ投影同一化された結果としてのパラノイド的な恐怖といえましょう。セッションが終わりに近づくにつれ、彼は「オッパイ母親」(転移上はわたし)に対しての‘犯罪的気分’を募らせるようであります。そして同時に、彼は「乳首・ダディ(父親)」を意識するわけです。それは「母親オッパイ」を規制し、すなわち「時間(ONとOFF)」、それから「空間(内側と外側)」を取り締まるものなのであります。そこで猛烈に迫害不安 persecutory anxiety が彼の中に惹き起こされることになります。例えば(1976/07/02)、こんなふうに彼は語ります。＜ヘリコプターがぐるぐる回っている。それで一人の男が開いた扉から押し出されちゃった。ミスター・クロック(時間)が中にいるんだ。・・それで地上にはポリス・カーが待ち構えている。それで、その男は逮捕されるってわけ・・。＞

さて、こうした「迫害者‘乳首・ダディ’」にどう対処するか。そこで彼が考えたのは、言うなれば懐柔策であります。つまりその彼に取り入るということ、つまり共謀者になりすますわけです。例えばテレビ番組の「バットマンとロビン」みたいにです。「母親オッパイ」を敵に回して・・。そして今やそれは、誘惑的でかつ淫乱な‘ペニス・コレクター’といったふうに揶揄され嘲られるといったことになるわけです。それは「バットマン」の物語のなかでは「キャット・ウーマン」になります。これは実のところ、淫乱でありったけの乳首＝ペニスを吸おうとする(promiscuous nipple-sucker)「赤ちゃん・アンドリュー」でして、その投影同一化であり、分割排除され理想化されているといったところでしょう。しかしながら、この野心的な‘右腕’(幼い息子)のアンドリューは、どうやらそう長くはこの「ダディ・ペニス＝乳首」との謀略的な同盟を維持することが出来ません。それは父親との間には水面下で熾烈な競争意識があるからです。例(1976/09/24)；彼は紙で鍵束を作りました。それは実際のところ、わたし所有の部屋の鍵をそっくり模倣したものです。そして次のセッションで、彼は苦々しく父親がせっかく自分の作った‘鍵束’を壊したんだということを報告します。＜ダディはいつもぼくの物を壊すんだ！＞と、頻りにむかっています。つまりのところ、「母親・オッパイ」(転移上ではわたしですが)を牛耳っているのは誰かということ。ダディもしくはMiss Yamagamiの「ホスピタル・ダディ」といったところでしょうか。それが誰であれ、彼にしてみれば‘邪魔者’でしかありません。この父親への糾弾はなかなか興味深いかと思われます。なぜなら物を壊すのはいつもアンドリュー本人なのですから。というのは、両親からうかがった話として、事実明け方に彼のベッドの周りにはたくさんの千切れた紙片が床に山となっているといったことです。そしてどんなに厳しく罰してもその夜中の困った‘習癖’(ありったけの紙類を切り裂くこと)は決して修まることのないことでした。ここからさらに、セッションにおいて、疑いもなく父親に向けられた彼のエディプス的競争心が表面に急浮上してまいります。例えば(1977/01/14)、彼は最初に2つのラジオを描いておりました。それがやがて2つの‘トランシーバー’になります。どちらにもONとOFFが書かれておりました。そしてそれらは一本の紐で繋がれます。われわれはご機嫌よくハロー！と互いに挨拶を交わします。その後すぐ

に、‘ライン’が切られたと言って彼は怒りだし、＜泥棒だ！殺してやる！＞と、ナイフを手にした恰好をしてみせます。しかしながらやがて、＜ぼくがセロテープを貼って修理したからね。もう大丈夫だよ＞と、わたしに得意げに請合うのでした！

※第二段階：(1977/02/21～1977/08/05)

「両親の結合 (parental unity)」への嫉妬心が燃えさかり、それで彼ら(ここでは彼のこころの内では、母親と性交しているところの「ダディ・ペニス」ということになります)に対抗しての激烈な怒りを含んだ侵入的な攻撃が彼の「肛門愛的自慰空想 anal masturbation phantasy」の表面上に姿を現してまいりました。ここには「ヴァギナ＋ペニス＝口＋乳首＝肛門＋指」といったことがうかがわれます。例えば(1977/03/07)、こんな具合にです。指人形を差して、それをアンドリューは‘悪いやつら’だと言います。そして雷をそれら男と女目掛けて落とします。それで彼らは雷に打たれて死ぬといったことです。それからもう一つ(1977/03/28)、彼は砂箱で「砂の城」の下に指を差し入れ、それを掘っておりまして。そうしますと、そのいかにも火山の噴火口みたいなトップの部分から、ロケットが月を目掛けて飛び立ったのであります。そのようにアンドリューは語ります。そしてそのすぐ後で、彼は女性人形を掴み取り、それを捻って、股を広げて両足をグイッと引っ張ったのです。無言のまま…。そこには何ら言葉は添えられることはありませんでしたが、痛烈な抗議がうかがわれました。それから、彼の遊戯でこんなことがありました(1977/03/30)。トラックに乗せられた動物たちが動物園へと運ばれてまいります。そこには二人の飼育員がおりまして。そこでどうにか皆落ち着いたところで、何度か‘ブリザード(雪あらし)’が突発します。そこで彼らは飼育員に導かれ避難所へと誘導されようとしています。だがうまく行きません。彼らはそのブリザード(実際には砂であります)の中にあえなく飲み込まれてしまうのでした。このような彼の遊戯空想内容において特に目立ったこととしては、母親の「内側の赤ちゃんたち inside-babies」へ向けられた熾烈な口唇愛的な羨望でありましょう。彼らは、その「内側の乳首」(それは彼の心の内では「ダディ・ペニス＝乳首」ということになります)から、両親の性交中に‘分け前 feeds’をもらっているわけなのです。

そしてここで「躁的防衛」が登場します。つまりアンドリューこそがすべてを牛耳るものとなり、つまり彼の直腸からは糞便、彼のペニスからは尿といったもの、それらすべてをわたしに食べさせようとして躍起になるわけであります。つまりは、われわれ二人それぞれの役割の逆転劇です！ここに糞便(poo-poo)および尿(wee-wee)の自己愛的過大評価が見て取れます。例えば(1977/03/14)、アンドリューはとても野心的かつ成功している‘果物市場のオーナー’になります。そして彼はズル賢くわたしに(この場合は買い物客というわけ)彼の‘プープ-poo-poo ウンチ・バナナ’を騙して売りつけます。(ここには明らかに揶揄されたところの父親の「ウンチ・ペニス fecal-penis」との同一化が見られます！)彼は内心ほくそ笑んでいたわけですが、指摘されるとゲラゲラ笑い、無邪気さを装って＜ああ、間違えた…＞と言い、代わりに良いバナナをわたしに手渡すのでした。また、こんなこともありました。アンドリューは歌を歌っておりまして(1977/07/08)。＜ほらね、ミルク、ミルク、レモネード、…チョコレート＞と…。いちいち彼の胸の乳首の辺り、それから彼のペニス、それから彼の肛門の方を指し示しながら…。(実は、この直前には‘救急車’の絵を描いていたわけですが。幾らかこうして己の傷つきを認めながら、でもその‘羨みの感

情’を「躁的防衛」で始末したといったところでしょう！）さらには、彼はレストランのシェフになりました（1977/07/13）。わたしに「ステーキとポテト」の料理皿を運んでまいります。なんだかひどく侮蔑したふうに横柄な態度を装って・・・！そして彼が言うには、＜先生がぼくに意地悪するんだったら、ぼくだって意地悪するんだ・・・＞ということでした。もうじき近づくホリデーが意識されており、だからこそ躍起になって自衛策をあれこれ講じていたのでしょう。でもその結果、「授乳する母親オッパイ」（転移上ではわたしになります）を誹謗するといった彼のヒポクリシー・嘲りの絶え間ない攻撃のおかげで、わたしは「キッチン・オッパイ・マミー」どころか、今やすっかり単なる「オマルのマミー」になりさがったというわけであります！

夏季ホリデーが近付き、彼の分離不安はいよいよ表面化してまいりました。アンドリューはいかにも落ち着かず不安定でした。何に自分がしがみついたらいいものやら戸惑っていたのです。いかにもわたしとの生命線（life-line）は断ち切られてしまうといったふうでした。或る日ホリデーについて語りながら、怒り狂ったふうにわたしに詰問します（1977/07/18）。＜ぼくのこと殺すつもりだろ？ぼくのこと追い出すつもりだろ・・・（You kill me! You are getting rid of me!）＞と。もはやそこには冷やかしたり、はぐらかしたりといった、いつもの余裕はありません。これに引き続いて、「ダディ・ペニス」をめぐって彼の内なる葛藤が表出してまいります。それが良いものか、もしくは悪いものかどっちだろうと、心の内で大いに煩悶するわけです。要するに、それは‘ガーディアン（守護者）’か‘迫害者’かということになりますが、裏返せば、信頼か疑惑かということが問われていることになりましょう。殊に、「ミスター時計・ダディ」が問題となります。その‘規制 regulation’ゆえに、アンドリューはとことん刃向かうしかなさそうです。

この時期、彼はわたしに向かって＜クソくらえ（Shit your bum）！＞と悪態を付くことが頻繁になります。除け者にされるという疎外感ゆえに、‘好奇心 curiosity’はさらに深まってまいります。それでどうやら「肛門愛的自慰」はいよいよ苛烈になってまいります。指が肛門へと侵入し、その秘密の抜け道から「母親オッパイ」の体内へと探りをいれてゆくわけであります。それで、去勢不安もまた・・・例えば（1977/07/17）、彼はこんなことを語っておりました。道路工事をしている男が掘削機で穴を掘っていたのですが、‘事故’が起きます。＜・・・指が挟まった・・・＞と。実は、この時点で彼はオモチャの‘クロコダイル（鱷）’を手にしていたわけですが、折々に不安げに見つめながら、その大きく開いた口に自分の指を押し入れておりました。こんなふうに、「母親オッパイ」への疑惑は熾烈になってまいります。例えば、「悪いお家」であります（1977/07/27）。それは2つの部屋があり、キッチン、風呂場があるものの、しかしトイレがありません！そこには200人もの泥棒たちの巣窟であり、彼らはオシッコをあっちこちにするものだから、臭いのなんの！といったふうな・・・。勿論、これは「Miss Yamagamiの‘ホリデー・家族’」に対する情け容赦ない肛門愛的および尿道愛的攻撃であるわけです。「見捨てられる」といった痛烈な感覚、それから「救出される」希望はまだあるといったジリジリと切羽詰った思い、そうした錯綜した思いのあれこれが彼の頭のなかでスッタモンダしておりました。例えば（1977/08/03）、彼の呟き＜もう、お終いだあ！（・・・it’s all over）＞だったり・・・でも、それから後、彼の遊戯のなかでこんなことがありました（1977/08/05）。「救命艇^{しま}」が飛行機から落とされたのです。それは水の中で溺れかけている兵士を救うために・・・といったこと！果たして休み明けのセッションにアンドリューは戻ってこれるかどうかであり

ます。5週間のホリデーの期間、待つこと・待たれることに耐えられるかどうかを試されるわけです。どうやら自信はなさそうです。このセッションの終わりに、休み明けの日時を改めて彼に告げますと、くぼく、来ないもん・・(No, I won't)>と混乱した頭で冷やかに言い放ちます。いかにもくざまあみろ。泣きっ面はむしろおまえのほうだろ・・>と言いたげに・・！

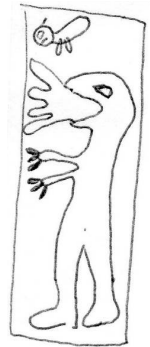
※第三段階；(1977/09/12～1978/01/09)

1977年の夏頃の或るときに、家のなかの模様替えが取り組まれました。そこでアンドリューは個室をもらえることになったのです。そして、部屋の中の整理整頓は自分でするようにと命じられたわけです。それを彼なりにプライドを持ってやり遂げているようであります。しかしながら、彼のセラピイのセッションにおいては、‘不在’の「乳首 & オッパイ」、すなわち彼の心の内では悪なるものであり迫害的でもあるところの「結合両親像」に向けていっそうのことパラノイド的不安が募ってゆくようすがうかがわれました。

そこで「トイレ・オッパイ toilet-breast」的セラピストの機能は大いに試練を課せられたわけです。彼は心のなかに、羨望からくる誹謗中傷やら、シニシズム、偽善、不信感といったものをどっさりと抱えもっていたのです。実際のところ、彼は一度わたしに向かってくこのジグソーパズル、解んないだろ(You don't know this jigsaw-puzzle, do you?)>と、いかにも挑戦的に言ったことがありましたが、まったくもってその通り。彼の頭は‘ゴミ箱’みたいで、そのころのイメージやらフィーリングの切り刻まれた破片が溢れんばかりに詰まっており、何もかもがごちゃごちゃになっていて、われわれのどちらにしてもそれらにどんな意味があるのやら、ほんとうのところその狙いが何であるのか、さっぱり解らないのでした。特にそこに潜在するところの情緒的痛苦(emotional pain)が問題でした。言うなれば、わたしにしてみればまるで‘忍者’相手に戦っているみたいで、その正体なるものはいつも雲隠れしてるといった感じで掴みどころが無い。わたしが‘目潰し’をくらわされることはしょっちゅうで、翻弄されていたといえましょう。無論、翻弄されていたのはそもそも彼自身であったわけですが・・。そこには、「理解される」ことを欲するどころか、むしろ「理解されまい」と頑強に抵抗し、むしろ「理解されない」ことを愉快がって、ざまみろ！とせせら笑う彼がいたのです。かつて彼は、両親にくぼく、お勉強なんかしたくないもん(I don't want to learn)・・>と言っていたとのこと。さもありません！それに、しばしばわたしとの間でも‘役割の逆転劇’を図り、セッションの終わりにくおやまあ、ぼくのオッパイ、もう出なくなっちゃったよ(Oh, my teat is running out!)>と言って大仰に笑ったり・・。その‘おちゃらけぶり’はなかなか大したものでありました。しかしながら、或る意味、そこにはかなり深刻な程度に彼の成長が阻まれている証拠がうかがわれました。恨み、羨望、そして幼児的ナルシシズムといったような・・。

アンドリューの飽くことなき食欲な‘口’は、とことん「母親オッパイ」との一体感といった至福を味わうことを希求するわけですが、それもいつも終わりというものが待っております(セッションにしても同じ・・)。たぶんオッパイのお乳が出ないのかもしれませんが、またお乳がいっぱいになるまではしばらく待たなくてはならないといったこと。そうでありますから、彼は「母親オッパイ」に騙されたというふうを感じるのです。ここで彼は或る痛みを伴う事実気づくわけです。それは、「ダディ・ペニス」が「ヴァギナ・マミー」を性交にお

いて「精子 semen」で充たすことに。そして彼の「舌・唾」ではそれに対抗しようがないといったことです。結局のところ、彼女の気持ちはそっちの方へいつも授乳の合い間（セッションの合い間ということでもあります）に向けられているに違いないと思うわけです。例えば（1977/09/30）、彼はこんなことを言っています。＜先生は蛸^{たこ}だよ！長い‘腕’を持ってるわけだ・・・＞と。この「蛸ーダディ・ペニス＝乳首」は、他の子ら（わたしの抱える病院の子ども患者たち）をも順番に授乳しているといったことになります。わたしが内に抱え、かつ彼には与えることのないお乳の量を押し測り、彼は圧倒されるのです。そしてどうも自分の分け前があまりにも少ないと思うわけです。それでいきり立って、わたしに向かって折々に侮蔑的にこう叫びます。＜パンティを履いたらどうや（Put your knickers on）・・・＞と。（つまり、わたしの‘乱交 promiscuity’を当てこすっているわけです！）そして特に或る日仲良しのトムの誕生日パーティに招かれることになり、それでいっそうのこと妬みそして羨みの感情が強化されます。それにわたしの他の子ども患者に対しての敵対的な‘兄弟葛藤’も噴出します。彼は「指人形遊び」をしながら、冴えないお天気模様のことに触れてでしたが、人形たちにこんな会話をさせております。＜内側もつままないし、外側もつままないし・・・＞と。そして憂うつそうに唾を吐きます。もはやアンドリューは「母親オッパイ」の‘内側の子ども’でないのです。未練を残しながらも断念するしかなさそうです。彼はどうにかして‘外側の子ども outer-child’になろうとしていたのです。事実、この頃彼は学校でのお勉強に意欲を見せ始めておりましたし、お気に入りの女の子だってどうやら出来たみたいです！例（1977/10/19）；紙で‘メジャー’を作ります。それで指人形の背丈を測ろうとします。が、どうもうまくゆきません。どうやら自分の‘おちんちん（willy）’のサイズを他の子らもしくはダディのそれと比較しているようでした。でも内なる何かが邪魔をしているらしく、自分が大きくなるイメージをなかなか掴めません。わたしに向かって、＜ぼくは21インチで、先生は6インチだ。ざましろ！＞などと訳の分からぬことを呟きます。矮小感で気持ちが萎えそうなのを奮い立たせていたのでしょう。そして、しばしば苦々しさとヒリヒリした感情が嵩じると、彼は「父親・ペニス＝乳首」へまともに突っ込んで対決を挑むのでありました。言うなれば、「おちんちん・バトル（penis-battle）」であります。例えば、「スーパーマン・アンドリュー」が炎を吐く「怪獣・父親ペニス」を相手に奮戦している図のように・・・

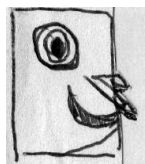


或る時（1977/10/26）；アンドリューは瓶の水を啜っておりまして。しばし白昼夢的な状態に浸っており、それで彼は呟きます＜マミーのオッパイ・・・！＞と。ところが間もなくして、嫌悪感を露わに、＜なんだ！中に針が入ってるじゃないか。ピンだ！危ない・・・ナイフじゃないか！＞と吐き捨てるように言います。これはほんとうのところ、彼の情け容赦のない侵入的な‘舌’の投影同一化といっているでしょう。「舌＝指＝ペニス」というわけで、それは彼の遊戯においてしばしば‘鉄砲’、‘剣’、‘弓矢’そして‘鞭’といったものになります。それでもって「両親の性交」に割り込み（cut-in）、何が何でも止めなくてはといったことでしょう。それはこの後の資料の中にさらに詳細にうかがわれます。例（1977/11/02）；ハロウィーンの前の晩のこと、彼はキャンドルの灯りのともるカボチャの話をしておりました。ところが、それから急いで、彼は別のこと、家庭内での電気代節約（power-cut）がどうでこうでといった話題に切り替えました。つまり‘カット’というわけ！さらには、「母親・ヴァギナ」への侮蔑やら冷やかしいよいよ辛辣になります

(1977/11/02)。<お店に或る男がいて、そこに女が買い物に来るの。25本ものペンをひったくり、盗んでいっちゃった・・・>と、彼はさも可笑しそうにケタケタ笑いながら語ります。つまりのところ、それは魔女で‘ペニス・コレクター’というわけ！そこには、彼の口唇愛的貪欲が投影同一化されておりました。

やがて、彼の肛門愛的自慰空想において「両親・カップル」を殺害するといった断固とした行為に並行して、それがため去勢 castration もしくは死 death といった刑罰が彼のこころの内であっという間現実味を帯びてまいりました。例えば(1977/11/04)、彼の遊戯において、「クロコダイル(鱷)」と「鍵男 key-man」とが互いにくずはぐれつの格闘をしておりました。つまりのところ、それはアンドリューの貪欲な「口＝舌＝指」と、それから「ダディ・ガードマン」との対決なのです！そしてすぐに、彼はわたしに顔をまっすぐ向けてく先生のこと、いっそ殺せたらいいのに・・・死ぬ(I wish I could murder you・・・Dead！)>と歯軋りしながら、いかにも凶暴な顔つきをして睨むのでした。それで、わたしが死んじゃったあと、どんな感情を持つかしらねと彼に訊きますと、彼は胸を押さえながら、いかにも苦しくてたまらないといったふう、崩れ落ちるふう、床に倒れます。＜誰かがぼくのこと撃ったんだ・・・>と、わたしの履いていたブーツ(＝父親ペニス？)に目を遣りながら、そう言いました。そしてそのまましばらく床に横になっておりましたが、ふとひどく神妙な声音で＜・・・地下牢・・・そこは冷たいんだよなあ>と呟きました。そして或る日のこと(1977/11/11)、サーカスで犬が炎の燃える輪をくぐるといった芸をするのを見たとかでその話をしておりました。すると彼はパニックを起こしたふう、かなきり声をあげます。＜ほら、ぼくの鼻が皮剥けちゃった・・・焼けちゃったんだよ>と言います。この場合、彼の「肛門愛的自慰」においては「鼻＝指＝ペニス」といったことになりましょう)。実際のところ、この時期、アンドリューはどんな小さな指のかすり傷でも大騒ぎをし、或いは床屋さんで髪を刈ってもらうなどとても無理だったのです。彼は、学校祭に着るコスチュームが破れ、穴が開いたのでセロテープで貼ったということをわたしに報告し、大いに嘆いてみせました。そして率直に、学校で針仕事 needle-work の時間があるんだけど、どうも縫うのが苦手だという話もしております。ペンシル・ケースを布で作っていたんだそうですが・・・(!)。自分を守る‘皮膚’が問題でした。どうも心もとないようです。それを意識したのか、彼は紙で‘盾’をこしらえております。その表には誇らしく一個の花が描き添えられておりました！

しかしながら、性懲りもなしにといえましょうか、クリスマスのホリデーが近付いた頃のことですが、アンドリューの中の「Mr. Nosy(鼻をクンクンさせて人の秘密を嗅ぎまわる、言うなれば‘覗き魔’といったところ)」の部分があっという間に前面に出てまいりました。遊戯資料のなかでは、例えば大きな望遠鏡を手にした「海賊」とか(1977/12/09)、それから長く醜い鼻が突き出た「魔女」、それに「魔女の猫 witch's



cat」です。その猫は黒メガネを掛けていたのですが、その前にも後ろへも飛び出す魔術的な目玉で何事もすべて見逃すことはないのだそうです(1977/12/21)。或る意味、ここにはわたしとの距離を測りながら、どうか‘繋がり’を保とうとする意識がいくらか働いてきたようにうかがわれます。



ここで彼は「ぼくのマップ」という地図を描きます。そこには3つ‘小島’があり、それぞれには矢印(↑)めいた樹が2本ずつ描かれておりました。そして航路は、スタートする一つめの島から2つめ、そし

て3つめ(ゴール)へとまっすぐに繋がっておりました！「海賊・アンドリュー」が「小島」(すなわち「母親オッパイ」)を次々に襲撃し我が支配下に置かんとする目論みでもあるようで、微妙なところなのですが、何はともあれ、そこにはまっすぐに突き進む覇気・気構えがうかがわれます。これ以前にも彼は「宝もの探し treasure-hunting-game」の地図を描いておりましたが(1977/10/21)、その「スタート地点」と「ゴール地点」を結ぶラインがまるで迷路のようで混沌としており、ゴール地点から「秘密の通路」を通して宝もの(ゴールド)のある「お城」に忍び込むことができんだ、と語りはしましたものの、途中で「地震」に見舞われたり、一向に宝ものには辿りつけそうになかったのです。つまりのところ、「肛門自慰空想」による妄想的な迫害感からいかに「腰砕け」になりがちで、びくびくおどおどした感じがあったのです。これと比較しますと、この間ずいぶんと進歩があったかのように思われました。ホリデーの間、どうにか迷子にならずにわたしと繋がっていられるような・・。



ところが実際のところ、2週間のホリデーをうまく乗り越えられなかったようでした。いかにも航行途中で「座礁」したかのようにアンドリューは風邪を引き、しばらくセッションに戻ってこれなかったのです。そして、ようやくやってきますと(1978/01/09)、彼の唇は赤く腫れておりました。ここにおそらく彼の万能感が打ち砕かれ、それで幻滅を味わうといった、苛烈な剥奪感がうかがわれます。彼の描いた一枚の絵がそれを示しております。それは「耳を失った猫」であります。(「耳＝口、言葉＝ミルク」ということでしょうか。) この絵は彼の自己像か、もしくは彼の嫉妬に満ちた羨望的攻撃の結果としての「わたしの家族の子ども」の誰かといったところでしょう。唇にあった小さな裂傷に言及し、彼は必死になってパンチをしたり、蹴りを入れたりといったパフォーマンスをやってみせます。想像上の誰かと格闘をしているといった具合でした。(わたしの「家族の子ども」の誰か、もしくは他の「病院の子ども患者」でしょうか?) それからすぐに気分を取り直し、「電話交換手(オペレーター)」になりすますわけです。父親の真似をし、ヘッドフォンを頭に、依頼を受けた番号どおりに、(紙製の)電話のスイッチボードに次々に「プラグ」を差し込み、電話回線に接続するわけです。なかなか堂に入った対応ぶりです！それはどうやら彼のこころの内では自らが「ダディ・ペニス(＝プラグ)」になって、「母親オッパイ」の中の全体の「操作システム」(この場合は「授乳」ということでしょうか)を万事わが手に掌握せんとしているようでした。勿論「躁的防衛」ではありますが・・。そして事実彼は、昨晩下階で親たちが夜分遅くまでパーティーをしていて、「クソツレ音楽」をがなりたてていたと文句を言っております。どんなに「聞き耳」を立てるにしても、親たちとの間には壁があり、アンドリューに子どもとしての「己の分限」というものにいくらか察しが付いてきたようにも感じられました。いくらか抑うつ的な痛みを伴いながらも・・。

※第四段階；(1978/01/11～1978/02/13)

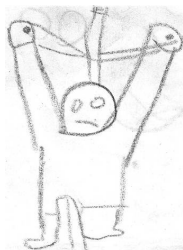
アンドリューが8歳の誕生日(1978/01/30)を迎える頃、彼のこころに或る特別な関心事が浮上します。それは、母親のからだのなかに「内なる赤ちゃん inside-babies」の占めるスペースがあるということ。例えば、彼がケント州地域での洪水のニュースに大いに気を揉んでいたのは、それがすなわち「両親の性交」への肛門的侵入の攻撃によるところの、文字通り彼の糞便かつ尿に塗れたところの「母親の内側」の汚染・汚濁が意味されていたからであります。そして「内側の赤ちゃん」についての気遣いが生じ

たということになります。例(1978/01/13);アンドリューは砂箱のなかで<Pier House(防波堤)>を作っていました。それは彼のころでは、よく行楽地で見かける遊園地とか回転木馬(メリーゴーランド)なのですが。それを囲うように‘バリケード’をもうけました。<これ、鏡というか窓だね・・それでね、津波が中に入ってこないようにするんだ・・>と語ってます。いざとなれば人々が避難できるスペースもあります!さらには(1978/01/16)、ブロックを使つての構成遊び。‘お城のような建物’とのこと。三階建てで屋根もあり、そして柱でしっかりと支えられているんだとか。<もつとお部屋をつくらう・・>彼は言い、それからその絵を描きます。<窓があつてね、外が見えるの・・>と語ります。どんなものが外に見えるのかなと訊くと、<飛行機とか、雨、雪、太陽も・・>と応えます。これは、いくから「‘トイレ・オッパイ toilet-breast’ セラピスト」の機能を示唆しているようです。つまりのところ、彼の投影を選び分け、濾過し、そして映し鏡になってやること。そして、それが内側で起きているのか外側で起きているのかを区別させるといったこと。それが今や彼の心のなかに徐々に培われてきているようであります。さらには、それらの映し返されたイメージを取り込み、そして彼の心的スペースに保持されるわけであります。それが「考え thought」のプロセスの基本的芽生えでありましょう。それを、彼は<・・ぼくの想像したことだよ(imaginary)・・自分のころのなかでだけ起こるわけ(it happened only in my mind)・・>と描写します(1978/01/18)。ここでどうやら「夢」、すなわち夜の間に頭に浮かぶイメージということになりますが、そうした「夢の産物 dream-products」が彼のころの内に保持され、記憶され、語られるようになってまいりました。

こうして「夢分析」へと新しいステップを取ったことで、われわれはアンドリューの内なる心的ドラマによりいっそう深く洞察を得ることができるようになってまいります。勿論テーマそのものはすでにお馴染みのものであったわけですが・・。例;彼の夢はこんなふうでした。それはとんでもなく巨大な鳥でした(図例;1978/01/18)。アンドリューはそれに石をぶつけたのです。それは物凄い、見たことも無いような長い歯(最初、爪だと思ったのですが)を持っておりまして。勿論翼も・・。それは<それって、人のからだを八つ裂きにしちゃうし、フィーリング(感情)をもグジャグジャに壊してしまうんだ(・・it can break your body, breaking feelings)>とか。さらに、それはとんでもない、見たことも無い大きな耳を持っているのです。<どんなに小さくも大きくても300マイル離れた向こうの物音を聞くことが出来るんだ。色は茶色だよ・・>と。確かにこれは「ウンチ・父親ペニス fecal-penis」による迫害といった妄想、まさにそれといえましょう。これは、肛門への侵入といった彼の自慰空想の招いた結果というか、つまり報復ともいえましょう。



そしてもう一つの夢。目を瞑^{つむ}って、彼は懸命に記憶を甦らせようとします。それは二人の‘幽霊’でした。アンドリューを窓から放り投げてしまおうとするわけなのです。彼はその絵を描きます。<ほらね、こんなふうにはぼく落ちてゆく・・それで、ぼくを釘で釘付けしたんだ・・>。それはまるっきり磔刑図であります(図例)。それから、彼は十字架にかけられた人間を粘土でつくりま^{つむ}す。でも木の枝にぶらさがっているひとということにして、ブランコのようにからだを揺らしてあります。でも直にそれは彼のこぶしで握りつぶされてしまいま



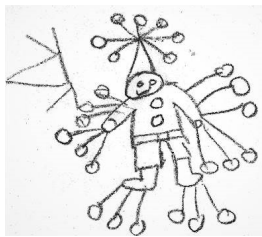
す。それから直に彼は奇妙なすすり泣きのような声をあげます。それから<・・ほらね、何か吠えてるでしょ。‘見えない犬’なんだ。幽霊のお友だち・・。それで幽霊に人々を殺せと告げるわけ。それでね、今それが人を一人殺したというわけ・・>。それからこの「殺人者」を描きますが、途方もなくでっかいのだと彼はコメントします。<・・まるで空みたいに！>ということでした。さらに思いついたのは、<それって、まるで象に踏んづけられるみたいなの・・>とのことでした。ここには、すべて吸い尽くされてまるで‘幽霊’と化した「母親オツパイ」が、彼のこころの内で姿は見えないにしろ、邪悪かつ敵対的な‘犬’である「父親ペニス＝乳首」と共謀し、報復してくるといったパラノイド的不安がうかがわれましょう。それは彼の口唇愛的破壊性の投影同一化なわけですが・・。こうした類いの不安感および痛苦の性質は、他の夢にいっそうより鮮明です。例(1978/01/20)；500フィートもの男がアンドリューに向かって、<あっちへ行け！太った豚め！でないと、食っちゃうぞ>と叫んでいるといったこと。それから実際に、その男はアンドリューの2本の脚を食べてしまうのです。そして嘲^{あざわら}うかのように、<ほら、どうなったか(鏡に映っている)自分を見てご覧！>と彼に言います。見ると、なんと鏡に映っていたのは「ドラキュラ」なものでした！これこそ、怪物的ともいえる貪欲な‘ミルク吸い milk-sucker アンドリュー’の自己像といったところでしょう。すなわちここで語られているのは、「父親ペニス＝乳首」による報復であります。その攻撃に晒され、2本の脚＝乳首＝歯＝ペニス、それらすべてがアンドリューのこころのうちでとことん収奪され尽くされるといったところでしょう。

この後間もなく、彼の空想生活において新しい局面が現れます。すなわち、‘内なる父親像’には2つの違った種類があるということであり、その詳細を極めた区別がなされるようになったのです。例えば、その夢の一つ(1978/01/23)；「忌まわしげな男 horrid man」がアンドリューの腕を掴み、そして彼をぐるぐる回すのでした。そしてバイクのシートに乗って、そのまま彼を連れ去ろうとする瞬間、そこに「やさしくていいひと friendly man」がやって来て、彼を救助してくれたというわけです。これを語った後すぐに彼は絵を描きました。<これが先生の‘ダディ’だよ。こんなふうなの。ほんとうは蛸^{たこ}なわけ。8本も脚がある。いや、もっとだ。たぶん20も・・>と彼は言う。それから彼は遊戯空想に没頭します。そこでは「蛸」は、沈没した船から水のなかへと放り投げられ溺れかかっている人々を救助せんとしております。問題は蛸が何本脚を持っているかということでした。つまりのところ、それ次第で救助する人の数が決まるわけです(図参照)。そして実際のところ、外の世界に投げ出された(‘born-outside baby’)「赤ん坊・アンドリュー」に生き延びるチャンスはどのぐらいあるのか、それこそが問われていたのです。そしてセッションがお休みになる度に、いうなれば‘授乳の合い間’ということになりましょうが、彼のこころの内は、信頼か疑惑か(希望か絶望か)で大いに揺れ動くのでありました。つまりのところ、「慈愛深い乳首・ダディ」によって「母親オツパイ」の腕にもう一度抱えてもらえるものかどうか、もしかしたら彼は「直腸マミー」の排泄物(ウンチ)として、邪悪なる「ウンチ・父親ペニス fecal-penis」によって排斥されてしまいはしないか、といったこと。そしてちょうどこの時期に、彼は学校行事で「国立博物館」に見学に出かけ、そのおかげでセッションがお休みになったのですが、それで後者の妄想的迫害感がさらに募ったということがありました。戻ってからのセッションでこんな遊戯がありました(1978/01/27)。彼は積み木の「お城」を2つ築きます。それぞれの陣地に2つの砲台が



置かれていて、そこにオモチャの兵士たちが警備しておりました。直に物凄い、辺りを切り裂くような爆音が聞えました。それぞれが互いに攻撃を仕掛けているのです。そしてそれをしながらも、彼は慌てず、すばやく持参したポテトチップスを袋から取り出し、口に突っ込むといったことをしました。(ポテトチップス＝糞便ウンチ＝砲弾といったわけでしょう。)わたしの胸を指差して、<おやまあ、先生のオッパイって、‘ココナッツ’ じゃんか！>と言ったことがありますが(1978/01/25)、どうやら彼にとって「ホスピタル・ダディ(父親ペニス)」は手強い敵手というわけで、‘信頼’はまだまだ先の話のようであります。ほんの少しながら憧れが兆し始めていたのですが。例(1978/01/25) 夢；<男の人、とても優しいの。ぼくをドライブに連れて行ってくれたよ・・>とのこと！

どんなわずかなフラストレーションにも、彼は‘はじき出される drop-out’ ことを恐れ、それを避けようとしてか、彼はしばしば「母親の内側」への暴力的な侵入を企てんとするようであります(母親の肛門から押し出された‘アンドリュー・ウンチ’は、元へと引き返そうと躍起になるといったところでしょう)。さらに引き続き、「肛門愛的自慰空想」において「万能感的償い omnipotent reparation」が生じます。それは「内的対象」の疲弊についての不安もしくは恐怖が嵩じるためであります。例(1978/01/30)；この日、誕生日であってもわたしからお祝いのプレゼントをもらえないと解ってひどく失望し、彼は一枚の絵



を描きました。それは「ピエロ」で、何百もの‘ヨーヨーの眼’を持っているんだそうです(図例)。これは、「Muppet Show」に出てくる「Miss Piggy (豚子さん)」にも似たMiss Yamagamiの戯画であります。‘子豚たち(子ども患者たち)’を授乳するたくさんの‘乳首’をもつ「母豚」としてわたしを大いに擲擧しているわけです。この‘ヨーヨー眼’について語っている間、彼は頻りに腰を左右に大きく横振りしております。それはいかにも、‘オマルのマミー’としてのわたしの内側に排泄しているかのようでした。投影同一化としてみると、この「ピエロ」はアンドリュー本人にもなります。すなわち、侵入的な眼＝ペニス・乳首＝‘鼻’でもあり、これ以前に登場した‘長い鼻の突き出た魔女’やら「Mr. Nosy」にも一脈通じるものです。さらには、この「ヨーヨー眼のピエロ・アンドリュー」は TV 画面に登場します。つまりのところ、‘オマルのわたし’が‘テレビ・マミー’にもなったというわけです！その空っぽの TV の画面上に映し出される映像そして音声はすべて彼の描く絵だったり彼の奏でる音声であって、それらは万能感的に‘ダビング・ミキサー-dubbing-mixer’の「アンドリュー・赤ちゃん」によって充たされるといったことになりましょう！

しかしながら、こうした狂乱乱舞的な mad spinning-top「自慰空想」にはかなりのリスクがあるわけです。「内的対象」に地理的な混乱 geographical confusion がもたらされるために、彼はごく簡単に‘迷子’になってしまうわけです。彼の内側に、同じく外側においても、良いものを抱えた‘良い対象’が見失われて、てんで探せないわけです。それは、彼の遊戯に明らかです。例(1978/02/06)；フットボールの試合です。彼が言うところでは2つのチーム「トップナム Toppnam」と「ボトムナム Bottomnam」との対戦です。熾烈な闘いが繰り広げられます。彼はぶつぶつ何やら言っています。<前 front・・後ろ bottom>、それで最後には混乱の極みとなり、<ああ、ぼくのオッパイが湿ってきた my teat soggy！

>と悩ましげに悲鳴をあげます(ぼくのオッパイ＝おちんちん willy のことでしょう)。その‘おちゃらけぶり’は相変わらずにしても、ここには閉所恐怖症的な妄想不安がうかがわれます。さらにはこんなことも・・(1978/02/07)。彼は紙飛行機をつくり、それに紐を付け、手に持ってそれをぐるぐると回転させておりました。<ぼく、どこなのかな。目が回って分かんないよ・・>と言い、それからパタッと床に倒れてしまいました。まるで突然死みたいにな・・。それから、彼は夢を語ります。飛行機が‘雪嵐’に遭ったということでした。(この時点で、確かにそれは砂箱のなかの砂に埋もれてしまっておりまして。)それから慌てて、<早く飛行機に乗り込もう・・。病院に行かなくちゃ・・>と呟きました。(これでどうやら彼は‘方向感覚’を取り戻したかのようでした！) しかしながら、こうした「内的対象」の‘トップ(オッパイ)’と‘ボトム(臀部)’の区別の曖昧さから惹き起こされる内的混乱を、彼はその後も執拗に引き摺ってまいります。それで、対象のなかにアンドリューが抱えられる(つまりコンティンされる)「スペース」の有無が大きく問題になってゆくのでした。

※第五段階；(1978/02/15～1978/03/22)

やがてアンドリューのセッションをそろそろ週3回から週1回に減らしてはどうかという提案が両親側から出されました。それは元々学校での授業を欠席しなければならないことの不平をアンドリューが言うようになっていたからなのです。その件が「親面談」の際(1978/02/27)両親との間で話し合われました。彼らはアンドリューに満足的な変化がもたらされていることを認め、それを語ってくださいました。彼はぐんと見違えるほどに落ち着いてきたということ、学校のお勉強にも集中できるようになり、その態度も随分と意欲的になってきたとのことでした。そして彼は、学校へ母親の付き添いなしに一人で朝登校できるようにもなっておりました。またわたしから見て、彼ら両親にも、そのアンドリューに対する態度が目立った変化が認められました。以前に比べてうんとリラックスしたふうで、概して機嫌がよく、親であることに自信を持ちつつあるといったふうでした。そして学校からも、アンドリューの学業成績が伸びているし、友だちづきあいにも問題はないと報告されております。そこでわたしはアンドリューの週3回のセッションをしばらくこのまま継続し、夏頃には治療終結することを彼らに提案しました。

この時期、彼のセッションで一見して明らかとなっていたのは「偽-成熟 pseudo-maturity」でありました。そこには偉そうに叱責する、侮蔑する、辛辣にケチを付ける、冷やかしバカにするといった横柄さといったこと、それらがまさに全開といった状態になりました。例えば、<もしぼくが先生ならば、そんなことはおそろく言わないと思うよ！>といった冷やかな脅し文句であつたり・・。それに彼はセッションの始まりにおいて、わたしを出し抜く恰好で部屋のなかへ一目散に駆け込んで、それでわたしの椅子をわたしが座る前に陣取ろうとするのでした。こうしたいかにも横柄で不遜ともいえる彼の態度には、実は「内的対象」の消耗を巡っての‘抑うつ的感情’が秘められていたとも言えそうです。例(1978/02/15)；彼はガソリンスタンドを話題にしておりました。石油がもう品切れなんだそうです。(Miss Yamagami の‘ミルクオッパイ’が涸れてしまった?)それから彼は夢を語りました。父親がダブルデッカーの乗り合いバスに轢かれて死んだというものです。それを語りながら、こっそり薄笑いを浮かべておりました。というわけは、おそらくそれは、「ダディ・ペニス＝乳首」がついに彼の噛み付く‘口’によって引き抜かれ、あえなく

なったといったことであり、もしくは‘性交中の「母親・ヴァギナ」」によって押し潰されたといったことかも知れません！ それで、それらの「結合対象(オッパイ&乳首)」による報復として、今度は彼自らが大いに傷^{いた}みつけれることが想定されたわけであります。それは紛れもなく、逃れようもない心的現実のようでした。例(1978/02/17)；アンドリューはこっそり腕を引っ掻いておりまして、やがて傷口から血が出始めます。そこで彼は、わたしにいかにも哀れっぽく訴えます。＜ねえ、助けてよ(You help me)＞と。それからごく自然にある連想が心に浮かびました。彼が国立博物館を訪れた時のことです。そこで巨大な怪獣やら蜘蛛^{くも}を見たとのことでした。特にその蜘蛛の‘腕’は血を吸うということでありました。そしてすぐに彼は、フットボール試合を父親と一緒に観戦しに行った折に、実は「ドラキュラ・ポテトチップス」を食べたという話をわたしに打ち明けました。後悔後に立たずということになりますが、どうやら自分が取り込んだ‘内的迫害者’を意識しているようでありました。それからすばやくわたしに背を向けます。＜先生はぼくのこと痛い目に遭わせる You hurt me !＞と言って…。今やわたしは‘外側の迫害者’というわけです！ 彼は血の出ている腕の傷口を頻りにこすっておりましたので、それはどんどん痛みを増してゆくようでした。それで堪え切れず涙が噴き出してきました。そして彼は静かにしくしく泣いておりました。

そして今や‘内的迫害者’（外側でいえばわたしになります）との間に和解を取り付けたいと願ったものか、彼はわたしに‘小さな夫 little-husband’ふうな態度をとりました。もう一度わたしの‘内側’を立て直さんとするかのように…。でもそれにしただけで、明らかにまだまだ彼自身の糞便ウンチに肛門愛的価値づけが大いにあったわけですが…。例えば(1978/02/17; 図例)、彼は園芸師(ガーダー)の絵を描いておりました。そして、こんな説明をします。スベードを手にも、まず地面に穴を掘り、そこを広く平らにしてから、球根を置くといったこと。でも重要なことは、それら球根を余り深くは埋めないこと。土で覆い被せてしまわず、上の先っぽを少しだけ土の上に出しておくといったこと。そうでなければ土の中で迷子になってしまう、と彼は言うのです。そして彼が花の絵を描きましたところ、なんと興味深いことに、それは上下が逆なものでした。指摘されて、それに修正を試みながら、＜…下のほうじゃないよね。上だよ＞と一旦は言いますが。もう一つ逆さまの花を付け加えます。＜花はこんなふうなものもあるよ。死んでいるんだ…長くは生きられない＞と。(彼の心の中では、おそらく「ウンチ=花=赤ちゃん」が混乱しているのでしょう。)ここで、彼の性器的生殖能力が全然無能だと悟るや、「ダディの性器(Daddy's potent-penis)」への嫉妬心かつ羨望が募り、それでいよいよ「アナーキズム」へと突っ走るといったことになるわけです。例(1978/02/22)、彼は絵を描きながら、それが＜ピーターと狼＞という物語だと語ります。そこにはピーターのダディ(父親)(羊飼)い)がおります。居眠りをしております。それでこっそりピーターは父親の銃を盗み出そうとします。「母親オッパイ」の‘内側の赤ちゃんたち’の「守護者ダディ」たらんとするアンドリューもいるにはいるのですが、羨望の強い破壊的な「狼」・アンドリュー」にはとても太刀打ちできないといったところでしょう。後に彼は、このダディを‘グランパ(おじいちゃん)’にしてしまいます。それはつまりのところ彼のこころのなかでは年寄りで、たぶん‘不能 impotent のダディ’といったところでしょうか。



しかしながら、わたしが両親と「親面談」をした以降、セッションの終結を聞かされた彼は、ごく自然にこんなことをわたしに語っております(1978/02/27)。<鳥が卵を抱えているのを見たんだ。3つの本当の卵だよ。ちゃんと生きているんだ(real life)！チェシングトン動物園でね。普通はそんなもの誰も見れないわけだけど…。何故って…カーテンが仕切られていて、その裏だからさ。光が充分ではないから見えないの…>と。つまりのところわたしの履いているスカートをめくってみて、ちょっと下から覗いてみたってことでしょうか？そこで3つの卵、すなわち彼の週3回のセッションを引き継ぐところの別の3人の‘新しい子ども患者’がいるのを見たってわけでしょうか？そこに一種の安堵もなくはないわけです。わたしを完全に疲弊に追いやったわけでもないという意味でしょうから…。そしてそこから、彼の幼児的な口唇愛的破壊力に対抗すべき「ダディの大きな息子(Daddy’s big boy)」になろうとする野心が新しく芽生えたことになります。例(1978/03/01)；彼は紙で兵士の被る帽子を作っておりました。それを頭に乘せ、わたし(軍曹＝ダディ)に向かって<Sir！>と敬礼をします。彼は‘お城(マミーオッパイ)’を警備する兵士だとのこと。でもすぐに、それは真っ赤な嘘だということになります。実のところ、彼は「ロビン・フッド Robin Hood」(robbing foods 食糧を奪う泥棒というわけ！)なんだとか。これと似たような、同じテーマが語られます。そこには彼の「償いの力 reparative force」と「破壊的な力 destructive force」との間の‘内なる抗争’が歴然と認められます。例(1978/03/03)；‘虹’の絵を描いていたのですが、そこにまた雨が降ってきたり雷鳴が轟くやらで、どうにもアンドリュウの‘内なるお天気模様’は安定しておりません。でもこんなことを彼は語っております。雪が降ってきて、路上に行き交う人々は凍りついて瞬時に‘氷の塊’の彫刻みたいになるんだとか。<…でもね、あったかくなると、氷は融けてくる。…それで思い出す(remember)んだよね…>と。確かに、凍りついた心は麻痺するということがあるということでしょう。でもいつの日か彼の中にうごめく‘春めいた気分 spring-feelings’を予感しております！こうして治療終結に向かって取り組む(working on the ending)ことがどうやら始まろうとしておりました。例(1978/03/06)；アンドリュウは「ミッキー・ハウス」の絵を描いておりました。ディズニーに登場するキャラクターのステッカーを貼ってゆきます。こんなことを呟きながら…<貼り付けよう…しっかり取り組むんだ。もっともっと頭で考えて…ゴミみたいな要らないものは捨てて…それでミッキーのお家をきれいにしなくちゃ…(…putting into…to work on…more thoughts, leaving rubbishes, and then …makes house nicer…>といったふうに…。しかしながら、それもすぐさま、嫉妬心と羨望が猛然と噴き出てきてしまうわけです。それはわたしが‘良いもの’であると気付けば気付くほど、そこに潜在している‘豊饒なる食べ物’(わたしの言葉たち、考え、アイディアといったこと)をわたしの‘次の赤ちゃん(患者たち)’に残して去らなくてはならないということが耐え難く感じられたからなのです。それで彼は大きな‘鉄のボール iron-ball’について語ります。それは古い家屋の解体作業に使うものとのことでした。ガンガンその鉄のボールを打ちつけて家を木っ端微塵にして潰^{つぶ}してしまうわけです。それでいくら使えるものがあれば、それは‘修理改築 re-mending’のために取って置くといったことなんだそうです！

これに引き続いて、彼は‘ガンマン’に成りすまします。ガンベルトを腰につけております。そこにあるバッジにはなんと「フランケンシュタイン」の顔が描かれておりました(図例)。それはわたしに或ることを思い出させたのです。かつて彼はこんなことを言っていたことがありました。<先生の脳みそを奪い取れたらいい



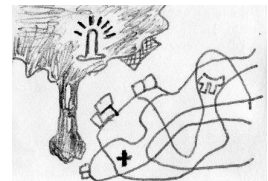
いのになあ・・それに先生の眼だって奪い取れたらいいなあ・・。それに耳も口もだ・・I wish I could take your brain away.I wish I could take your eyes away・・and ears and mouth too) >と。それをわたしから聞いたアンドリューは面白がり、それを敢えて次のように訂正します。<ぼくは男だ。だからいいよ、先生はオッパイ(teats)を取っておきな・・>。(それから急いで心変わりをする。)<いや違った。ぼくは一つのほうのオッパイ(bosom)をもらうからね。先生はもう一つのほうをもらっておきな・・>とちゃらかし、高笑いをします。が、自分の性器の辺りを見遣って、何やらひどく失望の体となり、苦々しげに<・・臭いオシッコ・・>と呟きます。どうやらここで、うぬぼれと欺瞞に彩られた「偽の自給充足的自己(pseudo-self-sufficiency)」も今や破綻したということになりそうです。実のところ、内的対象との(部分対象レベルにおける)自己愛的取り込み同一化が著しく、結果的にアンドリューは奇妙奇天烈な継ぎ接ぎの、まさに「フランケンシュタイン」であったともいえるわけです。ここに至って「偽ー成熟」の解体作業、その上での「真の自己」が問われてまいります。前途多難ではありますが・・。そこで注目されますことは、わたしの語る「work on(しっかり取り組み、考える)>という言葉がどうか理解し、彼自らがそれを積極的にセッションの中で使い始めていることです。ここに何やら期待が持てそうにも思われたのです。

※第六段階；(1978/04/07～1978/05/31)

彼がやがて辿り着いた次のステップというのは、成人の‘性器的性愛’なるもの、その謎めいた秘密についての気づきでありました。ここでようやくそれが「幼児的エロティズム(肛門愛的自慰)」とは違うことが意識され始めたということになります。例(1978/04/07)；彼は或る日、絵を描き終わり、その地下鉄の線路を指差しながら、こんなことを語っております。<ぼくね、地下鉄がすごく怖いんだ・・>と。電気が流れている。それで誰かがそれに触れたりでもしたら、焦げて死んでしまう。だけでも列車は大丈夫だね。だってそれ自身が電気を持ってるから・・>と言います。おとなたちの‘性交’を巡って、つまりはヴァギナとペニスとの性器的繋がりというわけですが、あれやこれやと想像を働かせ、皮肉めいた嘲りやら難癖を付けては自己正当化したり・・。特に母親がその非難的であります。例(1978/04/07)；復活祭のホリデーから戻ってきた折、母親が夕食のしたくが遅れたということでグラニー(おばあちゃん)に叱られていたという話を、彼はわたしに語ります。それはとてもありそうにないことです。それも母親が美容院に出掛けており、そして彼女の髪の毛を乾かすのにひどく手間取ったからだと言うのです。(実際のところ、性交で母親が恥毛を濡らしたといったことが意味されていたのでしょうか？！あり得なくもありません。いずれにしてもこれは、2週間の復活祭ホリデーにおけるわたしの‘不在’についての、彼なりのいかにも訳知り顔の皮肉的合理づけといったことになりましょう。)彼は無邪気さを装いながらも、実に辛辣な皮肉屋なのです。そしてどんどん高飛車な物言いをするようになりました。例(1978/04/12)；わたしのことを‘シッコたれのお尻 shit-bum’^{かたまり}と悪態を投げつけたあと、彼は今や「窓ガラスの清掃人(a window cleaner)」になりすまします。そして<・・ほら、よく見えるようになっただろ。おまえさんはまるでウンチの塊だからね・・。そういうこと！>と侮蔑的に言い放ちます。(つまりのところ、排泄と性交がごちゃごちゃになっているようです！)しかしながら、そこには疑いようもなく、痛み of 感情

がうかがわれるのです。勿論、親たちの性交から排除されているといった感覚です。それは、彼の次のような振る舞いに明らかです。例(1978/04/12);彼は扉の穴を覗きます。そして必死な声でこう呟きます。〈ぼくのこと、置いてかないで(wait for me)・・・!〉と。そしてその「肛門愛的自慰空想」において、親たちの性交が糞便やら尿的な性質を帯び、興奮の坩堝^{るっぼ}と化した結果、アンドリュウにとって自らが抱えられるスペースをどこにも探せずにいるわけです。見捨てられるということ、それで彼らの姿がどこにも見つからず見失ってしまうとか、彼らに忘れられてしまうとか、実にそうした恐怖は甚大なものでした。例(1978/04/14);彼は自分の名前の書かれた札(name-plate)をつくりました。そこには名前だけでなく、彼の年齢および住所も書かれてありました。そして、いざその名札を花の絵柄の描かれた「紙袋」のなかに入れようとしめすと、なんとびっくりしたことに、それは開けられないようにセロテープで蓋が閉じられてあったのです! ああ、やっぱりそうじゃないかと、疎外感をここで改めて確認したというわけです!

彼がここに至って学業面で熱心で意欲的になったというのは、算数だったり、地図づくりだったり、言葉のスペリングだったりですが、こうした彼の問題、彼のなかで育ってゆく性愛を巡ってなんとかそれに折り合いを付けようと、規律やら秩序を身に付けようとしていたものと考えられます。或るとき、彼が何かに取り組んでいたときのこと(1978/04/14)、ふと彼の呟きが漏れ聞えました。〈何が正しいか間違っているか、それが問題だ(What's wrong and right, that's the problem)・・・〉と。確かにその通り!そこで彼なりに考え抜いたであろう、その成果と思われる一枚の絵があります。



「灯台と港」がそれです(1978/04/19;図参照)。ここでは、母親のからだがその「内側」に於いてどのように機能しているのかについて、彼なりの考えが入念に仕上がっているかと思われます。海の中にある「灯台」は港の入り口

に近いものであり、河そして湖が海とも繋がっております。そして地上には鉄道が走り、車道には車が行き交い、それはいろんな方向へと拡がっています。なんとそこには学校もあります(幼い子どものための学校、それからもう少し年齢の上の児童の通う学校も・・・)そして教会もありますし、それに女王陛下のお住まいの城もあります!ここで肝腎な点は、いろんな「繋がり(connection)」が壊れていないことでありましょう。特に「母親ヴァギナ」と「父親ペニス」ですが・・・そして次のもう一枚の絵には、その



港湾の中に一隻の救命艇が見えます(図参照)。警邏中のような様子。航行する船舶がもしもの場合、岩礁に乗り上げるといった事故を防ぐのに、事前に勧告をするわけです。ここで注目されるのは、母親の「内側」における「ダディ・ペニス」の機能でありまして、すなわちその秩序を守らんとする統制的側面を担っているわけでありまして。そのように、アンドリュウの「肛門愛的破壊的侵入」を阻止せんとしていることになりましょう。

そうであっても、彼のなかの「小児的エロティズム(肛門愛的および尿道愛的)」はしばしば圧倒されるほどに苛烈であります。やがてそれを自らの内側においてコントロールしなくてはならない必要性がいくらか自覚され始めたといえます。例(1978/04/20);彼は「道路標識」を作っておりました。それは学校が近くにあるから(学童たちに)注意するようにといった標識も含まれております。彼はオモチャの車を道

路で走らせ、その標識があるところに至りますと停車し、車を引き返します。＜おっと、‘マスター’が言ってる。「こっちじゃない」って・・・＞と呟きました。彼の‘内なるダディ・ブレイキ’が、母親の‘お尻’（bottom）に何が何でも突っ込もうとする彼の性愛的衝動を抑制するのにいくらか機能し始めたということでしょうか。だが、尚も頑強に抵抗しております。例（1978/04/21）；流し台に水を張って、そこに唇を押し付け、彼は水泡をつくっておりました。それでひどく熱意を込めて、なにやら呟いております。＜愛してるからねえ（I・love・you）＞と。そして、彼はまるで忘我の境といったふうに、しばしその興奮に浸っていました。そして彼はこんなふうに断言します。＜ぼくは、ただのお尻とおちんちんだだけだ。ぼくの欲しいのはオムツ・絶対に‘離乳’なんてしないから・・・＞とやら！ でありますから、治療終結に向けて取り組むこと（working on the ending）も前途多難といったところでしょう。

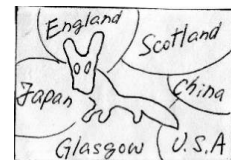
現実に彼のこころの中でわたしの‘内側の家族’を象徴する何かに遭遇した場合など、たちまち彼の口唇愛的貪欲さおよび羨望が再燃し、明らかに後退を余儀なくされます。例えば「動物農場」に学校から見学で訪ねた際など。それでセッションをキャンセルにしなくてはならなかったわけですが・・・こうして、「離乳するオツパイ（the weaning-breast）」を断念すること（renunciation）に対抗する自己愛的構造を、‘羨望’を中心として、さらに徹底操作（ワークスルー）することへとセッションは導かれていきました。そして抑うつ的の痛苦の感覚についてもまた・・・さらには、苛烈さを増してゆく去勢不安も・・・。例（1978/05/03）；コーン・ビーフの缶を開けるのに指を怪我した話しをした後で、砂箱で砂を掘ってそれをローリーの荷台に運び、それを箱の隅へと移動する遊びの最中、＜ビーフ・マン・・・＞といかにも敵意を剥き出しにして呟きます。そこで、わたしが介入し、それというのは、彼の指がわたしの‘内側’に侵入し、そこで待ち構えていた「ビーフマン・ダディ」が彼をひっ捕らえ、痛い目に遭わせたといったことかと訊くと、何ら応える言葉を持たず、唯圧倒されたといったジェスチャーをしたかと思うと、何を思ったか砂を手に掴み、それを自分の顔に掛け、そして‘盲目’になるのでありました。たとえ一時的にしろ・・・！ 実にここに、「母親オツパイ」の内側にある「ダディ・ペニス」の存在にいつそう光が当てられることになります。その‘美なるもの’は、実に目が眩んで正視できないものであるかのようでした！ ‘羨望’の矛先は、実にそこへ向かっていたわけであります。憧憬そして畏怖に翻弄される‘心のスッタモンダ（アンタゴニズム antagonism）’がここにかがわれましょう。さらには（1978/05/08）、乳牛の乳搾りの図を描いたあとで、彼は何か食わぬ顔でこっそりと牛の乳房の‘乳首’の部分の部分をハサミでちょん切ってしまったみたいです。いつの間にか消えて無くなっておりました！ それからもう一つ（1978/05/10）；砂箱のなかの‘火山’の噴火口を覗いておりましたが、ふと彼はわたしの‘青い瞳’（事実には黒い瞳だが）のなかを覗き込むことを思いつきます。それを彼はすぐさま自分の青い瞳と言い換えました。つまりのところ、彼とわたしは互いの瞳にそれぞれ吸い込まれてしまって、渾然一体化してしまうといったこと。こうした「完全なる一致」でしか、彼は自分の疎外されていることに収まりが付かないといったわけです。それで彼はきっぱりとわたしに申し渡します。＜ぼくは、先生が外に出掛けて外の世界の‘美’を見ることを断じて許さないからね（I don't want you to go out to see any beauties outside）・・・＞。実にこの‘美’なるものとは、明らかに彼とわたしが共有し得ない何かということらしい。それで、彼の目が見るに耐えられず、敢えて自らを盲目にした、どのような‘美 beauty’をわ



たしの‘内側’に見たのかと彼に尋ねます。農場見学で彼が見た何かに似ていたかしら？ でも、たとえそれがそうであったとしても、どうやらどんな美しいものも豊かなものもあってはならないということらしいわね。それですべてグジャグジャにになってしまうわけなのねと示唆すると、<切り刻んでしまう gone into bits・・・>と返答します。それから彼は、農場で見た「或る太った男」の話をします。「農場主」ということでしょうか。すなわちどうやらそれが「ダディ・ペニス」であって、Miss Yamagami の内側にたくさんの美、良きもの、富、そして‘赤ちゃんたち’をもたらすものであるといったこと。それにどんなに彼が憧れるか、今すぐにでも自分がそれになりたい。でもそれが叶わないわけで・・・。

そしてここで彼の「エディプス的葛藤」が、その前性器レベルと同様に性器レベルにおいても、いよいよ明るみにされてまいります。最初に、巨大なる生殖能力をもつ(potent)「ダディ・ペニス(& 睾丸)」に対する感嘆、畏怖そして抵抗といったことになります。例(1978/05/15)；アンドリューは椅子を両腕で取っ組んだかと思うと、それは彼のころではプロレスラーで、名前はコンドウと呼ばれる誰か(つまりは、どうやらわたしの日本人の‘夫’)であるらしく、そしてカナキリ声をあげます。<降伏せよ、降伏せよ submission！>と・・・そして勝利に酔い痴れるように彼は言う。<やったあ！ Miss Yamagami は、ぼくのもんだあ(Miss Yamagami on my willy)！>と。これが、わたしが「おちんちん戦争 the willy-battle)」と呼ぶところのものであります！でもその後、いくら考え深げに彼はこんなふう語りま

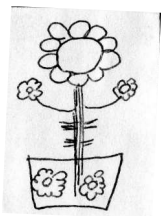
す。<ぼくね、先生がもう(終わる)時間ですと言うときって、誰か別の人に思えちゃうんだ(When you say time is up, I feel you are an another person)・・・>。そして彼は、一匹の‘雄のカンガルー’が「カンガルー・アイランド」と呼ばれる或る島でジャンプしている絵を描きます(図参照)。それは地理的に世界規模へとどんどん拡張してゆくみたいでした。(恰も「ダディ・ペニス」が母なる大地にたくさんのいのちの種を植え付けるみたいなんです！)それからこの「産めよ増やせよの神様」みたいな「ダディ・ペニス」は挑戦されます。それでそれら子孫(offsprings)のすべて(アンドリューの潜在的な‘兄弟姉妹’、もしくはわたしの新しい‘子ども患者’)が彼の肛門愛的かつ尿道愛的破壊性の犠牲となるわけです。例(1978/05/17)；彼は「King's Cross」の地下鉄の駅を描きます。信号機の故障ゆえに、地下鉄網がまったくのところ機能不能(!)となって、多くのひとたちが立ち往生し、大変な混乱を来しているといったことが語られました！さらには、こんなふうでした。真実「内側の赤ちゃんたち」が気になって仕方ないのでしょう。電話機のダイヤルを指でいじくっておりまして、密かに電話回線に聞き耳を立てて、‘彼ら’の動勢を嗅^かぎまわっていたようです。だがすぐさま、<ああ、ぼく鼻血が出て来た。死んじゃう・・・>と悲鳴をあげます。やがて退室する際、電話機を向かって、<おまえら、出て来い(You, come out！)>と一喝したというわけです！



ここで「ぼくは大きくなるんだ」ということと並行して、彼の心の中では母親(転移上はわたし)に対して‘近親相姦的愛’が頭をもたげてまいります。情熱的な愛そして献身を傾けるべき相手として・・・そして同時に、学校でもガールフレンド探しが始まります！そしてしばしば彼のポジティブな「父親同一化」を願う思いは、母親の‘内側’に於ける「父親・ペニス」の規制力に反抗することでいとも簡単にひっくり

返ってしまうのです。まさに「リトル・エディプス」のアンドリュウなのであります。それで結局のところ、性懲りもなしに敵対する「ライバルの父親」が彼に厳しく懲罰を課すことになるのを恐れるわけであります。

例(1978/05/19) ; いかにも大至急といったふうに彼は電話の受話器を取り、そして彼は言います<・・・ぼく会う約束をしなくちゃ・・・とても重要なんです・・・Miss Yamagamiに繋いでください>と。こうして交換手にMiss Yamagamiに繋いでくれるようにと頼んだあとすぐに、彼は「電話機」を濡らした紙タオルであっちこっち拭き始めます！それから、彼は999とダイヤルし、警察に連絡を入れます。指に怪我したとの身振りをしながら・・・。つまりのところ、近親相姦ゆえの‘去勢’の怖れが現実化されたということでしょうか！？ こうした内的葛藤がためにアンドリュウにはまるで心の平穩(peace)はありません。明らかに彼は、母親との禁断の近親相姦的愛で苦しんでいたといえましょう。それでも父親との和合をどれほど願っていたか。例(1978/05/22) ; 彼はいかにも心を込めて歌います<おお、ホザンナ！わたしのこころに喜びを・・・。‘主なる御方’に請い願います。どうぞ、おお、ホザンナ！>と・・・。しかしながら彼のこころの中では尚も執拗に「権力闘争(パワー・バトル)」は続きます。確かにアンドリュウにしてみれば、自分がどれほど母親にとっていい息子か(つまり、‘小さな夫’的な役割を担っているという意味で)、そしてどれほど献身的であるかを考えれば、その報酬として何らかの愛情をもらってもそれぐらい当然だと考えるわけです。例(1978/05/24) ; 学校祭に彼がどんなものを寄付したかという話をし、それは他の誰よりもたくさんだったと大いに吹聴します。そして私に向かって、<それで、先生はぼくに何をくれるってわけ？！(何もくれないじゃないか！)>と難癖を付けます。侮蔑と冷やかしの苦々しさを露わにして・・・。そして自分の分け前を貰うのにお預けなど食ってる暇はないといわんばかりに、彼はいつもの常套手段、つまりわたしの中の秘められた「ダディ・ペニス」にこっそり忍び込むのです。わたしの持てるすべてがもたらされる大元はそれだからというわけです。そこで、彼はわたしをじっくりとじろじろ観察し、わたしの動作やら話し方をそっくり真似しようとします。どうやらその内側に隠されている「ダディ・ペニス」を何が何でも取り込まんとしているふうでしたが、しかしそう簡単ではありません。それで彼は<クソッ！>と言苦々しく吐き出すように言って諦めます。そしてこの「自己愛的同一化」が何ら功を奏しないのを見て取り、深く幻滅し、彼はここで改めて^{ほぞ}臍を固めて「幼児的なエロティズム(肛門愛的かつ尿道愛的)」へと退行します。明らかに反抗心を露わにして・・・。例(1978/05/24) ; 彼は電話機に向かいます。まるで受話器を舌で舐めんばかりでした。興奮した声でケタケタと笑いながら、<Miss Yamagamiが何か言ってる・・・あつ、聞えるよ。もう一人のMiss Yamagami も・・・。Miss Yamagamiはあっちにもこっちにも、どこにだっているんだよ・・・。おお、ぼくオシッコちびちやう！>と・・・。それから彼は一枚の絵を描きました(図参照)。鉢植えのポットのなかに一本の花です。彼は<ポリーPolly>と呼びました。大きな花が咲いており、その下の両側に2つ小さな花が咲いております。それについて彼が言うには<大きくなる>って感じさせるんだとか。いかにもそれは生殖力の備わった‘睾丸’の付いた男性性器のようであり、彼の「大きくなる」ことに関連しているといった彼なりの理解がうかがわれます。



それでも尚のこと、彼にとっては「オシッコ・ペニス」に固執します。例(1978/05/31) ; 宇宙人が地上にやってくるといった物語を語りながら、オナラをしに来るんだと説明し、それから自分のペニスを両手で持

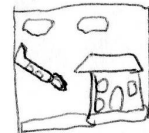
ち上げるような恰好をして、くほらね、プロップ、プロップだよ。赤ちゃんだあ。オシッコしてるわけ・・・ぼくね、オシッコして赤ちゃんを作るの。‘オシッコの赤ちゃん (wee-babies)’ ってわけ・・・>といかにも勝ち誇ったふうに言い放ちました。まさかこうした呆れた‘駄洒落’をそのまま学校で語っているわけではないでしょうが。学校の担任のおっちゃんには(1978/05/05)、アンドリューの語る事柄に時に首を傾げる(かし)ことがあるんだとか。まったくのところ意味不明というか、まるで付いてゆけないと・・・さもありなんでしょう！だが真実は、セラピー過程において今や8歳を過ぎた彼は尚も、「母親オッパイ」とのスタモンダを抱えていた頃の「赤ちゃん・アンドリュー」の内的現実をとことん「ワーク・オン work-on」していたといえましょう。

※第七段階：(1978/06/02～1978/07/07)

セッションの終了はあともう2ヵ月というところで、彼のこころの中でいよいよ‘断念’しなくてはならないという強烈な意識は避けようがなく、「離乳するオッパイ」が今や不承不承ながら焦点づけられてまいりました(1978/06/02)。<テレビ映画で「失われた地平 (Lost Horizon)」というのがあったけど、それについて以前話したことあったっけ・・・>とわたしに訊きます。流し台に水を張り、そこに顔を近づけながら、静かに水を口に含んでおりました。そしてすぐにどこか切迫した、息を押し殺したような叫びが聞えます。<待って・・・待ってよ>と。つまりのところ、陽が沈む「離乳するオッパイ・マミー」が彼の視野から次第に遠ざかってゆくといったことのようにでした。そして見捨てられるという感覚が猛然と彼のなかに湧き起こります(1978/06/02)。<Miss Yamagamiに電話しなくちゃ・・・ダメだ、出ないや・・・ぼく、ダディ(電話交換手)を呼ぼう・・・やっぱりダメだ。出ない！> そしこの耐え難い「分離」という痛苦から脱する唯一の逃げ道というのは、かつての「おちゃらけ鳥 mocking-bird・アンドリュー」に今一度返り咲くといったことのようにでした。そこで彼の痛烈な侮蔑に彩られた「母親オッパイ」は、何の価値もない、臭いだけの‘古靴’やら、もしくはただの「オシッコたれのお尻 shit bum」でしかなくなるわけです。ところが、逆説的にこのことが彼の妄想的迫害不安、「プー(ウンチ)・アンドリュー」といった自己イメージをいっそのこと強化することになるわけです。セッションに遅刻することはいつもそのことを確認することになります。例えば(1978/06/05)、<バスがいつもすごい混んでいるんだ・・・‘ウンチ’なんか運んでくれはしないわなあ(don't take poo back (to the hospital))>というわけです！こうした嘆き一色となり、‘捨てられちゃう drop-out’という感覚がますます募ってゆくのでした。実に、「プー・アンドリュー」がこの世に残れる価値などまったくないというわけであり、またアンドリューのこころのなかの「オッパイ・マミー」もいずれ跡形もなしに唯消滅するだけの運命のようでありました。彼は‘教会’の絵を描きました(1978/06/05; 図参照)。そこには一人の人が中において、もう一人が外にいるようです。<ぼくが死んでゆくとき、皆ひとはぼくのこと笑うだろな・・・>と、いくらか神経質な薄笑いを浮かべながら、彼はこうわたしに語ります。それから葬儀が執り行われます。それは「死んだMiss Yamagami」の葬儀です！それからアンドリューは歌います。<お誕生日おめでとう、Miss Yamagami！>と・・・彼にしてみれば、いっそのことわたしを死なせてしまいたいのか、それとも生き永らわさせたいのか(sparing)、どっちなのか、ひどくこころが揺らいでいたのです。何もかもが不確実で自分の心すら掴みどころの無い、至極危うい感じであります。こうした



内的葛藤は、この教会の絵に、あとでわざわざ「黒い雨」そして「半分の太陽」を付け加えたことでも明らかと思われます。そこにうかがわれるのは、来たるべき治療終結を迎えて惹き起こされた分離不安が募るなかで、それはいかにも耐え難く、それで彼は自暴自棄となって、結局のところ内に抱える‘内的対象’を絶滅させんと決めたようであります。まるで‘自爆’の決死隊みたいに…。いかにも「ニヒリズムの勝利」といった心象風景が見て取れます。例；もう一つ別の絵(1978/06/09)に、彼はこんなふうにコメントしております。＜飛行機が飛んでいた…でもエネルギーが尽きた…墜落する…家へ向かってまっしぐらに…人々は夕食を食べている最中だったの…魚料理とチップスがテーブルに乗っている。それで皆床に倒れてしまうの…それ(飛行機)が落ちてきてお家に触れた瞬間に、お家は爆発したから。爆弾が破裂するみたいに…。誰かが電話線に火を付けたから…。もう一つ爆発音…お家が爆破したとき、ガスクッカーに火が付いていたからなんだ…＞。それから流し台でしずかにしばらく水を飲んでおりましたが、砂箱へと移り、憂うつそうな面持ちで、どちらかという顔は凍りついたように無表情で、なにやら指で砂の上になぐり書きをしておりました。そこには、END(終)と書かれておりました！



破壊性が増強してゆくなかで、徐々に或る意味での罪深さそして良心の呵責といったことが浮上してまいります。それは、彼のこころの現実として彼が母親の‘内側の赤ちゃんたち’を皆殺しにしたという咎めがあるからなのです。それこそが彼のなかに深く巣食うところの「ネガティヴィズム」、すなわち自らの愛する能力についての信頼の欠如ということになりましょう。例；彼はこんなことを言っております(1978/06/16)。＜ぼくが産まれてから、ママは熱病にかかったんだって…＞と。(おそらくそれは、彼の母親が出産後に膣炎症を起こした事実が語られていたのですが、それだけではなく、どうやら母親がその後第二子を儲けることができなかったことをアンドリューは自分のせいだと内心思っていたようです！)それから彼は、扉の穴(母親のヴァギナ？)に向かって覗き込みます。そしてちょっと不自然な奇妙な笑みを顔に浮かべて、＜あの子、怖がっているよ…＞と呟きます。(それは彼の赤ちゃんの妹でしょうか？)母親の‘内側’を熱病に罹らせて、結果的に彼女の‘赤ちゃんたち’を皆殺しにしてしまったといったことに責任があるということでしょうか？この時点で、ごく自然に或る夢が記憶に蘇ります。＜一人の男がセント・ポール寺院の‘回廊’を歩いている…それから彼は命令を下す。＜皆、庭へ出ろ！と…それで何百人ものひとが彼の後を付き従ってゆくわけ…＞。そして何もかもが一瞬の内に真っ暗になって、消えてしまう。沈黙のみを残して…。それからアンドリューはカーテンの裏にナイフを見たのです。そして何百もの死体も…。そしてその男もまた自殺してしまうといったこと。アンドリューは彼自身の胸にナイフを突き立てる真似をします。劇的な身振りで…。＜なぜってね、彼は自分のことバカモノだと思って思ったわけ…何百もの人々を殺しちゃったんだもの…＞。良心の^{かしやく}呵責に苛まれ、自分一人では引き受けられない罪深さを共に担ってくれる誰かを探そうとします。＜ぼくね、ぼくのお友だちのMiss Yamagamiに電話する…＞と言い、それから彼は受話器を耳に当て、喜びの声をあげます。＜あれ、ぼくだ！ぼくはぼくの友だちになれるんだ(It's me! I can be my friend)…＞と…。確かにその通り！耳を澄ませば尚も彼の内なるさまざまな声が聞えそう…。彼の夢がまさにそうであるように…。彼はここでさらに＜ぼく、自分の声を聞いているよ(I am listening to myself)＞と言って、受話機

の一方を自分の胸に当て、もう片方に耳を傾けます。そして彼は、自らの内にこんな声を聞きます。
＜ドラキュラがまた息を噴き返した・・ドラキュラは二人いる。一人は自殺したけど、それで別のが生き返ったんだ・・＞とか。どうやらこの「ドラキュラ・アンドリュー」が関与する‘誕生劇’は、他の誰もすべて流産もしくは死産という悲惨な結末で幕を閉じるようです。そしてここで改めてもう一度「ドラキュラ・アンドリュー赤ちゃん」の出番というわけです！つまりのところ、断固として誰にも「母親オッパイ」を譲れないといった彼の徹底抗戦の構えを語っているのでしょう。

真実、この場合の「ドラキュラ」の再生は、彼の小児性羨望的破壊力がまた息を噴き返したということでもあります。それで、改めてもう一度彼は神なところの「良きダディ・ペニス」の生殖能力に挑戦するといったことなのでしょう。この闘いはいうなれば、「利己主義(egoism)」と「利他主義(altruism)」の対決といったことでしょうか。例(1978/06/23)；2つの積み木で作られたお城が向かい合っていました。明らかに戦いが起きているようです。わたしが何故に戦いは起きたのかを問いますと、＜彼らはかつては友だちだったの(大きいほうの城を守っている兵士たちを指差して)・・彼らが新しい^{よろい}鎧を手にしたんだ・・木みたいのでっかいの・・＞と返答し、この時点で彼は＜ぼく、ちっとも嫉妬なんかしてないからね・・＞と低く呟きました。戦いが続くなかで、アンドリューはカナキリ声を張り上げます。＜友よ・・友好を重んじよ・・維持せよ(Friends！ Friendship！ Preserve！)と・・それから彼は一枚の木の絵を描きます。それについて彼が連想したのは、＜秋だよ・・木の葉がほとんど落ちてる・・＞ということでした。それはすなわち、創造主「ダディ・ペニス」の生殖能力が疲弊したという意味になりましょう。しかしながら、この時期、彼の外的現実とは異なる趣きがあり、アンドリューは父親ととても折り合いのいい関係で、親密さを育んでおりました。一緒にゲームをして遊ぶことがとみに熱中されておりました。でありますから、セッションのなかで展開されている事情は、「父親ペニス」と友好を保つか、もしくは敵対する者として対峙するかといった、彼の内なる葛藤を表出していたものと考えられましょう。殊に、この場合の「父親ペニス」とは「ホスピタル・ダディ」であり、わたしとの転移状況では治療終結を巡って飽くまでも敵対せざるを得ないようでありました！

※第八段階；(1978/07/10～1978/08/05)

終了間近、あともう一ヵ月というところで、ここで見紛うなしに彼の「小児的自己愛」が募っていったのでした。(ここでは糞便および尿が価値づけられております)。母親のからだの内側‘inside’への侵入といった意図がよりいっそう明白となります。その彼女の「内側の赤ちゃんたち」を皆殺しにするかあるいは悪意ある害を為さんとするといったことです(転移上はわたしの新しい‘子ども患者たち’ということになりますでしょうが・・)。例(1978/07/07)；アンドリューの指が砂のなかに潜ってゆきました、彼はこんなふうに言います。＜嵐だ。インドで(実は日本！)・・＞と。例(1978/07/10)；彼が担任の先生の書棚から「Water Babies(水の子どもたち；チャールズ・キングズリ著)」の本を借りた^{おびや}ということを語っていましたが、そこでクスクス笑いをしながら、でもどこかしらそれらの‘裸の赤ちゃんたち’に脅かされているみたいでした。アイスクリーム・コーンを手にして、それを舐めていたのですが、それが彼を小さな魔法使いにすると言います。それで呪文を唱え、魔法の杖で人々を醜い蛙に変えてしまうんだとか。＜ぼく、ここで

オシッコしちゃおうかな・・・>など、いかにも挑戦的です。だんだん興奮してまいります。ここで神の懲罰的な力（現実にはMr. Rightという来学期の新しい担任なのですが）が呼び起こされます。彼の幼児的な、抑制のない、まったく素裸そのもののフィーリングに対抗するべく正義（justice）が求められたというわけです。そして彼の自慰行為（もしくは空想）を禁止せんとして・・・。つまりのところ、<お尻から手を離しなさい。そこいじっちゃいけません！>といったことでしょう。例（1978/07/28）；Mr.Rightについて話をしながら、彼はこんなふうに語ります。<怖いんだ・・・彼は魔法使いみたいです。呪文を唱えて、何するか知れないぞ・・・。頭を下に倒立しておれ・・・！>とか言ったり・・・。もしも彼が叫んだりしたら、ぼくは気絶しちゃう・・・>などと・・・。そしてすぐさま彼は床にバタリと倒れ、そのままジッと動きません（死んだふり？？）

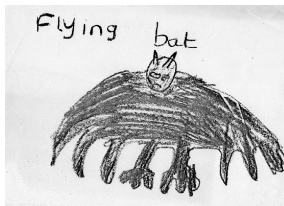
さて、彼が離乳するオッパイとしてのわたしとの関係において‘赤ちゃんの自分（a baby self）’を断念することに気持ちの準備がある無しに関わらず、治療の終わりは刻々と近付いてまいりました。そしてこの現実的なインパクトは彼においてかなりの痛みを惹き起こしたのであります。そしてその痛みの捌け口としてはそれをすべてそのままをそれ自身（「離乳するオッパイ」）へと投げ返すことでした。彼はそれに躍起になって取り組んだのです。（1978/07/12）彼は積み木を使って砂箱に建てていた建物を殴ります。<お家にピンをハンマーで差し込んでいる・・・お家が壊れる・・・>と呟きながら・・・。それから、次にこの、無惨に崩壊してしまったその代わりにお墓を立てました。十字架がその上に置かれます。彼はおごそかな声で<おお、神よ。イエス・キリストよ・・・。Miss Yamagami は十字架に掛けられたのです>。それからすぐにその後、彼は焦ったふうに叫びます<Miss Yamagami を取り戻さなきゃ・・・>と。それからなんと彼は‘八百屋さん（食糧品店）’になりすまします。2個の積み木を‘計り’として使います（それはかつてわたしのお墓であったものです！）そしてなぜか‘ジャガイモ’を売っております。ジャガイモ・ウンチ（potatoes=poo）というわけでしょうか。つまりは、彼自身の‘ウンチ’で壊された「母親オッパイ」の再生を図ったということでしょう！ 辛辣なジョークなわけです。

或る日（1978/07/17）、共有地の庭で彼が母親と一緒にボール遊びをしていたとき、犬がボールを咥えて行ってしまったという話をいかにも興奮したふうに語りました。（これは後に、実際にあったことだというのが確認されました。）この後、彼は喚きます。<ぶっ潰せ、‘ジャガイモのオッパイ’なんか！>と。（この‘ジャガイモ・オッパイ’とは、彼の後釜になる、新しい‘子ども患者’に奪われる、「母親オッパイ」としてのわたしへの羨望的なウンチ攻撃が意味されておりました。）そしてこの頃、しばしばセッション中に流し台で水道の蛇口から水をガブガブ飲むことが目だっております。恰もタンクの水を飲み干さんばかりで、つまり他の誰にもあげるもんかといったことでしょう。彼の口唇愛的貪欲さが再燃し、「離乳するオッパイ」の断念といった痛みに耐える能力がごくわずかであっただけに、彼は自己愛的防衛体制に立ち戻り、いっそうそれを強化したということになります。すなわちそれは彼自身の「直腸」の自己愛的理想化ということになります。つまり母親の「ウンチ・オッパイ」、その内側でアンドリュースは彼自身ウンチとなって寄生している（parasite-dweller）というわけです。そしてこの彼のなかの怪物的な「寄生虫的赤ん坊」は、「ダディ・ペニス＝乳首（母親オッパイの統制者 regulator）」による迫害に遭うわけです。そん

なふうに、ついに断念を強いられることになるわけです。それは、次の2つのセッションのなかで「ドラゴン」についての物語を書くなかで明らかにされます。例(1978/07/19&20; 図例); <或る日、ドラゴンが肉の塊りを見つけました。そこでそれを彼は口にします。それを食べながら、彼は‘骨’を吐き出しました。>(オツパイは彼の口唇愛的貪欲さに供され、邪魔な「乳首＝ペニス」は吐き出されるといったことでしょうか。)それからドラゴンは、つまり洞穴のなかへと入って



眠ります。> どんな気分 feeling なのかと訊くと、<すごく怖がっている。なぜって「蝙蝠」が飛んできたから・・・>とのこと。(ここで「ダディ・ペニス」が迫害者へと転身されたのか?)ドラゴンは魔法の呪文を知



っていて、それで彼自ら蝙蝠になり、それでその飛んでいる蝙蝠に触ると、それは死んでしまう・・・とのこと。(迫害者と魔術的に同一化し、迫害者に迫害して仕返しすることが意味されているのか?)そして物語は続きます。

<次の朝、彼は目覚める。そして男たちが穴を掘っているのを見た。ドラゴンは洞穴から出て、彼らに向かって一声吠えた。彼らを怖がらせて追い散らそうとする。男たちは動物の骨を探していたのだ。それから彼らは戻ってきて、死んだ蝙蝠の骨をものにしたってわけ。そしてそれを小さな洞穴のなかに隠すんだ。それから、彼らはドラゴンに矢を放つんだ。それでドラゴンは怒って、彼の口から炎を噴き出すわけ。男たちの一人がそれで死んでしまう。それからあとの4人の男たちは去ってゆく。・・・> この物語は、ドラゴンが遂にはそれらの男たちによって殺されるということで終わります。彼らが岩の塊り(アンドリューの言うところの‘ボルト’、つまり石弓用の太矢)をその頭に直撃させたからなのです。

アンドリューが躍起になって‘神’(「ダディ・ペニス」、すなわち母親の‘内側’での権勢)に挑み、抗っている間は降伏など問題外であり、どのような和解にも達することができないわけです。その結果、彼としては猛烈な敗北感を喫することになるのです。ドロップ・アウトということ!時間が経つにつれて、彼は恰も基督教の伝説にある<墮天使 Fallen Angel>そのままの心境であったといえましょう。遂にその時は来た!だが、尚も彼は‘助命’を嘆願しております!例(1978/07/28);この日、アンドリューはセッションにTシャツを着てきたのですが、そこには或る絵柄がありました。‘泣いている鯨’です!大きな涙の粒を流しております!そして<Save the Whale(鯨に救済を!)>とスローガンを掲げています。この時期、巷では鯨の撲滅を阻止せよといったキャンペーンが盛んであったのは確かです。アンドリューは、それからわたしのことを「髪の毛の虱」というふうに蔑みます。いかにもそれって、わたしの性器に居座ろうとする‘引付き虫・アンドリュー’のことでしょうか。それで、わたしが、もしも‘虱’は振り払われたりしたらどうするかなと訊くと、<怒るに決ってる・・・先生のあとを猛スピードで追掛けるよ・・・>とのことでした!事実、この時期彼がセッションを始めるとき、いかにもそんなふうでした。わたしの部屋に向かって死に物狂いで走ってゆくのでした!

しかしながら、彼の「最終セッション」(1978/08/04)になり、彼はようやくこの‘寄生虫的しがみつき’を放棄することに至りました。彼は2つの取っ手の付いている引き出しに顔を近付け、囁くような声でこう

語ります。＜アンドリューを終わりにしてもいいよ You can turn Andrew off now＞と・・。誰に言ってるのでしょうか？ おそらく「ホスピタル・ダディ」でしょうか。そして口から唾で泡をつくり、それを引き出しの鍵穴へとそれを押し付けます。＜最後なんだから、ぼくは何だって許されるんだ・・＞と彼は言います。それはまったくのところ「離乳するオッパイである」わたしに対しての‘最後のキス’であったのかも知れません！そこにはちょっとわたしの次の‘子ども患者（内側の赤ん坊）’に対しての意地悪な羨望的メッセージも込められていたかもしれません。彼は自分の書いたドラゴンの物語を手にし、＜学校に持ってゆく。新しい担任のMr. Rightに見てもらう・・＞と言います。おそらく彼への信義と忠誠を誓うといったことのようにです。それは‘外側’の父親的人物像になりましょう。ここには何らかの‘貢ぎ物’によって、敵対的で懲罰的ともなりがちな「ダディ・ペニス」を宥めんとする彼の懐柔策でもありそうです。さらには、フォルダーから彼が描いた絵を抜き取り、それらを持ち帰ろうとします。言うなれば、お片づけでもありますが、こうして自分もまた‘ついに片付けられた！’という思いがしたのでしょうか。退室する最後一瞬、その内なる感情の^{るつぽ}坩堝でからだ^{なだ}が麻痺したふうで、彼は扉を開けることが出来ませんでした。それでもどうにか「大きな男の子（お兄ちゃん）」といったポーズを維持することに懸命であり、そしてくじゃあね、また来年・・！＞と一言言って歩み去ってゆきました。

※エピローグ；

この二ヶ月後、アンドリューは「レビュー・セッション」に戻ってきました(1978/10/05)。そして彼は、もう氷ついた怒りの塊で、わたしを小突き回し、文句たらたらなのでした。皮肉っぽくわたしに、＜先生は、一体どこに行ってたんだ。アイスランドかい？＞と厭味を言います。「絶滅した怪獣マミー」のMiss Yamagami、そしてその氷ついた「オッパイ」というわけでしょう。そして偉そうに装って、自分は無事にどうにか脱出し、イングランドに戻ってこれたと喜ぶのでした！つまりのところ、凍結して死に絶えたわたしの‘ハート’にはアンドリューの居場所はもはやないということになりましょう。だが、セッション開始から30分ほど経って、彼の気分はいくらか平静に戻りました。彼はテーブルでなにやら描いております。彼は「カラーイング・イン(色塗り)」と言いましたが、一枚の画用紙に幾つかの切り抜かれた空白(つまり‘穴’)があり、その下にもう一枚の画用紙を置き、そこに色塗りをしてゆくのでした。＜ほらね、青色。いいでしょ。空みたいだよね・・こっちはオレンジ色。すごく楽しそうでしょ(cheerfulness)・・それから紫色、たくさんの雨降ってるの・・それから茶色。暗い・・^{もや}靄がかかっているね・・＞といった具合に。‘死んだ骸骨’と化した「マミー・オッパイ」(the dead skeleton-mummy)のMiss Yamagami のいのちを蘇らせなくちゃと、どうやら頭の隅で考えたみたいでした。確かにそれはカラフルでいのちが輝いておりました。そこには時にまた涙も・・。こうして、シニシズムに彩られた自慰空想によって無惨にも穴だらけとなっていた「母親オッパイ」(転移上はわたし)は修復されたようであります！そしてその結果として、今や彼のこころの内に「スペース」が出来て、そこには彼のさまざまなフィーリングがコンティンされたようでした。そんなふうに外側の「母親オッパイ・Miss Yamagami」を断念する(relinquishment)痛みにもどろろと耐えているといったふうでした。この時点で、わたしはアンドリューがわたしに以前語った或ること(1978/03/03)が想起されました。雪が降り積もって、家々を、そして道路も車も、そして人々をも覆ってゆきます。そして雪嵐にでもなれば、路上を歩いている人たちは瞬時にまるで‘氷の彫刻’のように

凍り付いてしまうといった話。そして彼は直立不動をし、そのままそこに立ち尽くしてしばし身動きいたしません。それからアンドリューは語ります。＜でもね、もしもあたかくなれば(氷は)融けてゆく。それから思い出すんだ(・・when it gets warmer, then melt・・and then remembers)・・＞と。思い出すって何をかしらと問うと、彼は考えあぐねて、言葉が見つかりません。それでわたしが＜・・考え始めるってことかな？＞と訊きます。すると彼はウンウンと大きく^{うなず}頷きました！そして満面の笑みで嬉しげにそこらじゅうを飛んだり撥ねたりしたのです。確かにそうでしょう。この最後の瞬間になって彼は考えたのです。そして何事か記憶が蘇ったのです。そして彼の内なる「スペース」に彼自らのさまざまなフィーリングがあること(そしてわたしにもまた同様に)、それを認めることができたのです。そしてこれから尚も、それらについて考え続けてゆくこと(work on)が彼の課題になりましょう。

謝辞；ここでわたしはこの「症例アンドリュー」を抱えるうえで、実に多くの方々からご支援いただきましたことをここに明記したい。まずはMiss. D. Weddell(わたしのトレーニング・アナリスト)に。励ましとサポートをいただきました。そしてMrs. M. Harris(The Tavistock Centre)に。この症例のプライベート・スーパービジョンでたくさんの刺激的なコメントを頂戴しました。そしてまたSt. George's Hospitalの皆さま方、わたしの直属の上司であるMr. John. Bremner(Senior Psychotherapist)をはじめ、主治医であるDr. H. Cameron(Consultant Psychiatrist)、そしてPSWのMiss.S. Walline 並びにMiss.J. Webster に。謹んで感謝申し上げたい。

参考図書；

- ・Meltzer, D. (1967)「The Psycho-Analytical Process」、
William Heinemann Medical Books Ltd.
- ・Meltzer, D. (1966)「the Relation of Anal Masturbation to Projective Identification」、
Int. J. Psycho-Anal. 47; 335.

■資料その4; アンドリューの最終レビュー・セッションについてのレポート

(日付; 1979年7月27日)

アンドリューの治療は 1978/08/04 に終了しました。それから2ヵ月後(1978/10/05)、「レビュー(review)」のため一度戻ってきました。それから改めて約一年後、最終の「レビュー」に彼は戻ってきたわけですが、それはわたしたちが会う最後の機会になるという取り決めでした。

ほぼ1年という間隔が空いたわけで、この間われわれは互いに何ら連絡はしなかったわけですが、アンドリューがわたしに対してまだとても‘親密な intimate’な感情があるようなのが驚きでした。このわれわ

れと一緒に過ごしたこの最後の時間、彼は以前に比べてとてもリラックスしておりました。わたしは彼と一緒にいてとても気分が楽なのです。そして彼の中に、言うなれば或種の‘魅力 charm’も見て取れたことでとても嬉しく思ったのです。彼は言語的能力の面でもよく育っておりましたし、なかなかユーモアのセンスもあり、その語る内容はウィットに富んでおりました。ほんの少し変てこな感じがなくもなく、例えば彼が何か冗談を言う度に、わたしがその意味をまるで解せずにいるのを察してか、<まあ、先生には解んないでしょうね・・・>と付け加えることを忘れません。そのクールで一見素っ気無い感じは、「マミー」（この時点ではわたしということになりますが）に対しての「秘めた愛」を悟られてたまるか、飽くまでも‘ぼくの心の内の秘密’と言わんばかり・・・この‘距離感’はなかなか悪くありません。今や、アンドリューは8歳半です。彼は、とてもバシッと身なりを決めてまいりました。腕時計までしておりましたし、このわれわれの‘最後のデート’になんとしてもいい印象を与えたいと腐心したあとが見られました。

彼は、暖炉に石炭が燃えている絵を描きました（図例）。それはかつてお祖母ちゃんのお家について<石炭が燃えていて、あったかいの・・・それで氷は融けちゃうわけ・・・>と彼が語っていた（1978/03/03）そのままです。暖炉の側にはお祖母ちゃんの座る椅子もありますし、どうやらお茶の入ったマグカップも用意されてあるようです。とてもあったかい気分にあふれています。その次に彼は、「Mr. & Mrs. Rainbow（レインボー／虹夫妻）」というタイトルの絵を描きま



した。それは車で象徴されており、彼はその前の部分を‘ミスター’で後ろの部分を‘ミセス’というふうに指差しながら説明しました。その‘ミセス’は恰も妊娠しているかのように太っておりました。そこにはわたしに向けた「Best Wishes（ご多幸を祈る）！」が込められているようでした。わたしはそれを、彼がわたしにお別れのサヨナラをする際の<どうぞお元気で good-luck！>の挨拶をしてくれたものと受け取りました。そしてこの場面の後ろに、彼は男の子たちがクリケットをしている

絵を書き加えました。それらの一人がバットでボールを叩いたところです。これはたぶん涙をなんとか堪えて振り絞り、どうにか意を決して「母親オツパイ＝ボール」のMiss Yamagamiを自ら手放したということでしょう。しかしながら、このすぐあと、彼は「離乳 weaning」の痛みに触れたようで、烈しくカンシャクを破裂させます。彼は「ビックベン」と「国会議事堂」の絵を描いていたのですが、すぐさまそれを茶色のクレヨンで激しく塗りたくり、<Shit（クソ）>と大きく書いて、それからクシャクシャに丸めてゴミ箱に捨ててしまいます。<サッチャーめ！クソ！>と呟きながら・・・。おそらくサッチャー首相の医療費削減政策について親たちから批判的な何かを聴いていたのかも知れません。自分も‘カットされた’という憤りはあったかも知れませんが、それと同時に、もしかしたら病院の他の子どもの患者らの行く末を幾分案じていたかとも思われます。真意のほどはよく解りません。しかしながら、ここでどうにか気を持ち直し、信義と忠誠を取り戻し、改めて「マミー」の‘ビッグ・ボーイ’に、すなわち献身的な「リトル・ハズバンド」になるといった野心を選んだようであります。ここでアンドリューの描いた絵には、一人の‘兵士’がテントの

外にあり、どうやら警備しているといったことのようなのでした。(言うなれば、テントは象徴的には「母親オッパイ」であり、「国家」でもありましょう。) <Be responsible! (責任を取らなくちゃ・・・)>というのがそもそもイギリス男児の‘本懐’であります。ここで改めてアンドリューは「自尊心」を取り戻したといえましょう。わたしの部屋を去る際、彼は自分専用の箱に向かってくじゃあ、来年またね・・・>と声を掛けたのであります。

わたしがMiss Wallline (PSW) の部屋に赴き、そこにお越しになっているアンドリューの両親にご挨拶をしました。アンドリューは待合室に留まり、わたしたちが出てくるのを待っておりました。わたしが彼のところに戻ると、彼は木馬の上に座って、何やら神妙な面持ちで、いくらか緊張しておりました。彼は‘われわれの最後’に気持ちを集中しようとしていたようです。わたしが彼に「また来年」というのは無いのだと告げてあったからです。わたしにさよならを言う段には、いくらか笑顔をわたしに向けはしましたけれども、でもやはり少しだけ悲しそうでした。わたしがこの建物から歩み去ってゆく姿を初めてみるかのような面持ちで、じっと考え込んでいるようすでした。ここにはもう直、Miss Yamagamiがいなくなるといったこと(わたしの帰国のことは彼に知らせてありましたから)。その事実を受け止めているかのよう・・・しかし彼の動作・表情には何ら苦々しさは見受けられませんでした。それは、わたしにはとても嬉しいことでした。

アンドリューの両親は、最近のアンドリューの学業成績がとても優秀であること、勉強することにとっても意欲的であること、それに放課後他の子どもと一緒に戸外活動にも積極的に参加するようになっていたことを報告してくださいました。すなわち彼が、社会的行動 social behavior の面でも十分に満足できる状況であることが示唆されております。わたしはとても嬉しく思います。

Chizuko Yamagami
(Child Psychotherapist)

■後記 — 美的葛藤、その‘背き’そして‘贖い’について —

アンドリューの母親は‘デカパイ’なのである。すなわちでっかいオッパイで、‘巨乳’とすらいえる。美しいとも魅力的ともいえない、野暮ったいだけの、唯の太った母親。だが、赤ちゃん・アンドリューはこの‘でっかいオッパイ・母親’に心底魅惑された。目も眩むほどにその美に圧倒され、酔い痴れ、そして痺れたのではなかったか！メルツアーのいうところの「美的衝撃 aesthetic impacts」ともいえよう。忘我の境はどれほど至福であつたろう。だが、事はさほどに単純ではなかった。その‘美的対象 aesthetic object’の官能性は実に悩ましいものでもあった。脅威となった。翻弄され、絡みとられ‘^{とりに}虜’となることの怖さ。何とかそれから背を向けようと躍起になった。そして心の内なる美的対象の‘解体作業’に延々と挑んでゆくのであった。彼の「サディズム」もそこに起源があつたといえなくもない。そもそも赤ちゃん・アンドリューは誕生後母乳を与えられても吸い付きが悪く、すぐに口から乳首を離してはオッパイから顔を背けた

ということが報告されている。そして彼の主訴となる家庭内での問題行動は、紙類を千切ること、頭を壁にぶつけること、夜驚であったわけだが。それで母親はほとんど困り抜いて、彼を‘ペスト pest’呼ばわりしていた。すなわち「始末の悪いクソガキ」というわけだが・・・やがて治療開始後、アンドリューの誕生後数日間に遡って、そこで真実何が起きたのか、それがセラピイのマテリアルとして転移状況のなかで徐々に証しされていった、とわたしは考える。彼の最早期の生きた「内的現実」の一端を覗きみる思いがした。実にそういうことだったのかと腑に落ちた。

ここに一つ、興味深い事実がある。アンドリューの誕生後、「母子同室」ではなく、母親は決められた授乳時間に「授乳室」を訪れ、母乳を与えていたということです。そこは「隔離病棟」で、母親は勝手に出入りを許されなかったようです。どうもこの授乳間隔がアンドリューには長すぎたのかも知れません。母親の直観なのでしょう。退院までの8日間、規則に逆らって「授乳室」に入ろうとして面倒を起こしたこともあったようです。わたしとの面接の折、＜あの子を取り戻そうとして、わたし大騒ぎをしたんです（・・・made big fuss about getting him back）＞と彼女は語っております。この病棟での授乳時間の制限がずうっと母子共に、どちらにも恨みとして尾を引いているようにうかがわれる。赤ちゃんアンドリューにすれば、授乳のお預けを食わされ、「母親オッパイ」に焦らされていたと考えることもできましょう。苛烈に欲するとき、それはナカッタ。そして泣き疲れて、もはや吸う元気もなくなったときに、それはアラワレルといったチグハグさ。この恨みそして敵意は、アンドリューの場合、セッションの中では「ミスター・タイム（時間）」に象徴されるところの「父親ペニス＝乳首」へと集約されてまいります。「母親オッパイ」を牛耳るライバルとして・・・その威嚇的な権勢力に圧倒されながらも、「エディプス葛藤」は、誕生間もない赤ちゃんアンドリューの中で既に発動していたといえましょう。苛烈さを増してゆく去勢不安もまた・・・。

その「父親ペニス」なところの‘美的対象’が崇高でパワーフルであればあるほど、アンドリューの徹底抗戦は激烈さを増してゆきます。ここに一枚の絵があります(図例; 1978/03/08)。夢の中に出てきた「バルーン・マン(風船・男)」を彼が描いたものです。それは「母親オッパイ」とも「父親ペニス」とも見えます。つまりのところ、敵対する「結合両親像 combined parental figures」を表象しているかと思われます。それにアンドリューが攻撃を仕掛け、歯(牙)を突き刺すわけです。すると穴が開いて、「バルーン・マン」は破裂し、それで中の水が漏れ出て、辺り一面‘洪水’となります！それで人々も、車も、家具類やらそこらじゅうのありとあらゆる物すべてが水浸しといった惨状になったのです。ここに彼の「サディズム」(口唇愛、肛門愛もしくは尿道愛的なそれぞれの意味で)が大いに展開しております！つまりのところ、己の卑小感に対する涙と憤りでありましょう！でもいつしか‘^{ほこ}矛’を収めるときがやってきたようです。この意味でも、彼が最初の「レヴュー・セッション」に戻ってきた折にした「色塗り(カラーリング・イン)」は実に感動的でした。そのようにして彼は、凍りついたシニシズムに彩られた「自慰空想」のなか



で無惨にも疲弊し、穴ぼこだらけになった「内なる母親オッパイ」を修復したのです！そしてそこに、‘いのち(カラー)’が蘇ったのです！ここに「修復する父親ペニス(reparative penis)の摂り入れ同一化」がうかがわれます。ブラボー！です。

現実のアンドリューの母親というのが、時には息苦しいほど我が子に愛情を傾けながら、その性格が概して威圧的かつ冷笑的なのが事を複雑にしていたかと思われます。そして母親と息子双方にとって主導権を巡っての攻防戦になるわけです。事あるごとに母親はこういう態度に出る。＜あんだ、マミーに勝てるつもりなの？まさか！勝てっこないわよ・・・＞といった具合。口を開けば、厭味、当てこすり、皮肉そして嘲りと・・・その辛辣さはとてもかなわない。だが、アンドリューは屈服してたまるかと、果敢に挑む。それも巧妙に、母親のご機嫌取りをしながら・・・。アンドリューはセッションの中で作ったものやら描いた絵などを母親の元へ持ってゆくことがあった。言うなれば‘貢ぎ物’。母親が喜ぶはずも無いのに、性懲りもなしに・・・。或る日、セッションが終わって、彼が母親にそうした何かを手渡そうとした時だが、彼らのこんな会話を耳にしたことがあった。彼女が彼に言う。＜あのね、それ、お母さんにくれなくもいいよ。自分で持ってたらどう・・・。お母さんはバックのなかにもう充分‘ろくでもないもの junk’がいっぱいあるからさ・・・＞と。アンドリューはそのまま引き下がらなかった。すぐさま＜ぼくのを‘ろくでもないもの’って言うてるわけ・・・＞と鋭く切り返した。すると母親が＜いやいや、そうじゃないわ。わたしのを言うてるわけ・・・＞と、うまく逃げた！「掛け合い漫才」みたいなのである。互いに諍^{そし}るやら腐^{くさ}すやら足の引っ張り合いをしながら、適当におちゃらけをやっている。どちらも満更でもないのだ。内心ほくそ笑んでいる。おそらく彼女は、どちらかというの内気で控え目な夫だけでは面白くなかったのだろう。むしろ自分に似た息子の‘負けん気’を喜んだ。そんなふうに彼らは一緒に生きてゆける‘家族’になっていった。リラックスして和気藹々とした家族！おそらく彼らだって、どうしてあの‘悪夢’から脱け出し、今のこの穏やかな日常を自分たちが手にできたのか解らないであろう。だが、わたしには解る。それは、ついにはアンドリューの内なる「美的対象」が‘再生(recovery)’したからである。おそらくそれを機縁に、彼の内なる「結合両親像」は再結合が遂げられ、そのようにして両親は彼のこころのうちに‘贖^{あがな}われた’からだということを・・・！

最後の「レビュー」でアンドリューの描いた「Mrs. & Mrs. レインボー」の絵を眺めながら、ふと思う。わたしが最後に見た、現実のアンドリューの両親(Mr & Mrs. R)にもどうやらそれが重なる。喜びに満ちている！自分たちが‘いい親’であることの自信が戻っている！「レインボー夫妻の絵」が彼の作品だとしたら、彼の両親もまた、実に彼の「作品」なのではないか！なるほど、親にとって子どもとは何と有難いものかしらという感慨にしばし浸った！ブラボー！である。こうして「大洪水」から「レインボー」へとセッションの道筋の展開を振り返りながら、何やら「ノア方舟」の聖書物語がここで彷彿とする。あの物語もまた、その主要テーマは神への‘背き^{そむ}’からやがて大洪水という試練を経て‘贖^{あがな}い’に至っている！かつてアンドリューは、こんなことをわたしに語っていた(1978/03/03)。彼の「マイ・ブック」の表紙に自分の名前を囲うように‘虹’を描いていたのだが。＜虹のこと知っているよね・・・雨が降り止んで、そうすると虹が出るんだ・・・ぼくが‘雨’に止まれ！と言うんだ・・・＞と。すべてが終わってみて、ああそうなんだ、

彼は事実そうしたんだなとわたしは思った。もはや「美的対象」から必死に後ずさりをしたり、背を向けるのを止めたということ。なぜならば、それが生命の根源であるのだから…。であれば、それとの絆に絶えず回帰せんとすることこそ希求される。シニシズムに対抗して、彼の情熱が保持されるためにも…。むしろ、こう言えるかもしれない。この凡庸ともいえる夫婦の一人息子、アンドリューは、案外途轍もなく得難い＜虹を追いかける男＞なのかも知れない！？彼が狂わんばかりに‘男純情’に身を焦がすひとであるなど誰が知ろう。どうやら彼はそれをうまく隠すだけの‘分別’を手にしたようでもあるし…。

実のところ、アンドリューには一つ困った問題があった。彼はセッションの中で手掛けたもの、主に絵画作品だが、どうしてもわたしの手元に預けておくことができなかった。この点で他のどの子とも違う。それらをこっそり引っさらってゆくのは明らかに‘ルール違反’であるのは承知していたわけで。そのように殆どの作品が‘紛失’したのはわたしにしてみれば実に惜しかった。だが、彼なりの理由があった。その一つは、自分の描く絵が「ドラキュラ」のように‘オソロシイ(horrid)’ものだからというのであった。つまりそれが自分の留守の間、わたしの‘内側’でどんな‘悪さ’をしでかすか、責任持てないといった思い。彼は制御し難い己の「サディズム」に気付いていた。つまりは、「ドラキュラ・赤ちゃんアンドリュー」の自覚があったということだが…。だからどこかにわたしへの思いやり(concern)があったと言えなくもない。それが深い「自己懷疑」から来ていたということが悩ましいわけで…。でもついに、彼が最後にわたしに会ったとき、描いた絵をすべてわたしの手元に残して去った！ブラボー！なのである。確かに、ようやくにしてわたしの‘レジリアンス’を恃む気になっていた。Miss Yamagami は大丈夫ということ！彼女に預けてもいい、託せるといったこと。それが彼の落ち着きを底支えているという気がした。こうして、彼は自分を抱えてくれる‘コンテイナー’としての「親なるひと」を^{たの}しみとし、そこにコンティンされる自分を‘価値あるもの’に感じられるようになっている。そのようにうかがわれた。すなわち、「自己信頼 self-reliance」が芽生えていた！このことが何よりもわたしを喜ばせる！

この「症例アンドリュー」についてまず思うのは、「捨てる神あれば拾う神あり」という諺である！アンドリューとその家族は世間でいえば、まったくのところ厄介というか、面倒でしかなく、出来るならば関係したくない類いの人たちだろうと思われる。誰も本気で関わろうとしたようには思えない。病院に紹介されてきた経緯を見ても、学校関係者に熱意はほとんど感じられない。彼は厄介払いされて、^{たらい}盥回しされてわれわれのもとにやってきた。そんな印象なのだ。ところが、われわれはどれほどこの「症例アンドリュー」を喜んだか知れない。マーサ・ハリスのセミナーに何度か発表したか、皆誰もが沸きに沸いた。ともかくにも彼の頭の中は、「オツパイ(teat)」と「オチンチン(willy)」、そして「ウンチ(poo)」と「オシッコ(wee-wee)」だけの世界で、しかもそれらは多様にして苛烈な「サディズム」に彩られ、救いようもないほどにぐじゃぐじゃに絡まりあって混沌としていたのだから…。まるっきり「クライニアン・ワールド」とも言えた！目の前に「ジグソーパズル」のピースが山となって積まれている図を想像してみられたい。呆然とする。何から手をつけていいやら…。＜おまえさんには解らんだろうなあ…＞といったふうに‘謎々’を仕掛けられているみたいであった。その彼の挑戦を受けて、われわれは徐々にそれらピースの一つずつを何らかの‘意味ある関連性’のなかで読解してゆこうとした。その面白さ！もはや今日では「タヴィストッ

ク」でも聞かれなくなっているという「母親オッパイ」やら「父親ペニス＝乳首」といった「部分対象 part-object」の概念を操作しながら、どうにかその穴だらけのこころの綴れ織りに「模様(パターン)」が見えてきた。誕生以降その最早期において「母親オッパイ」との関わりを赤子のこころがどのようにスツタモンダ(antagonism)しながら体験するものか、これほどビビッドに‘視覚化’された臨床例も珍しいのではなかろうか。

やがて、この症例は「タヴィストック」でのトレーニング・ケースとして、マーサ・ハリスから定期的にプライベート・スーパービジョンを受けることになった。彼女の語る‘言葉’には、分析家としての冷徹なまなざし、情緒的なレスポンス、そして柔軟な思考がうかがわれた。どんなにラッキーだったことか！

実は、それ以前に「セント・ジョージ病院」で直属の上司であったジョン・ブレンナーに折々にこのケースを報告していた。彼がどんなに喜ばれたか。それで興に乗じて、或る文章を書いてくださっていた。それをファイルのなかに発見し、40年余経た今それを読みながら、しみじみとした感動を覚えた。わたしは彼からこんなふうに教えを受けていたんだと改めて確認できた。そして「誰かの子ども」でいられた当時のわたしがとても懐かしかった！思うことは、やはり彼がスーパーヴァイザーとして優れているということ。全然難しいことを言っていないけれども、彼なりの論点がよく解るし、何よりもアンドリューというのはこういう子どもなんだと言うことがよく伝わってくる。その性格の中核にあるものがしっかりと指摘されている。いずれそれは最初から最後まで一貫してそうであることが彼のセッションを通して解ってくるわけだが・・・やはり優れていると思った。それで、この「症例アンドリュー」の最後に「附録」として、彼の文章を掲載することにした。ぜひご覧いただきたい。

ジョン・ブレンナーは誠に‘ハートのある’方であった。彼がどんなにわたしに肩入れしてくださったことか。病院で週一回定期的なスーパービジョンでお会いしていたのは勿論のこと、さらには St. John's Wood の閑静な住宅地にある彼のお邸にしばしばお訪ねし、指導を受けた。その書斎の窓越しに広い裏庭が眺められた。彼はくつろいでパイプを口に咥えながら、終始にこやかであられた。いろんな語らいがあった。彼はわたしをセラピストとして‘exceptionally talented(際立って優秀)’と評価してくださっておいでだった。正直なところ、わたしは彼の期待が些か重荷に感じることもあった。そして彼の口からしばしばく日本の子どもたちのために・・・>という言葉が聞かれた。わたしは帰国後、間もなく児童臨床から遠ざかったから、ずうっとその彼の言葉が気になっていた。彼の恩義に報いていないことが恨めしかった。今回こうして「児童分析の実際」に彼の文章を載せることで、幾分か胸のつかえが取れた思いがする。言うなれば、わたしの心に‘虹’が架かったような感じなのだ！これも実にアンドリューのお蔭である。こうしてわたしは何十年も経た今、かつてのロンドンでの掛け替えのない人たちとの出逢いをまた思い出すことができたのだから・・・。アンドリューはほんとうに‘不思議な子ども’だったと思う。

(2018/06/10 記)

■附録; Mr. ジョン・ブレンナーの所感: 或る日のアンドリューについて

(日付; 1976年10月25日)

これからさまざまにセラピーに於ける諸問題を提起してまいります、必ずしもそこですべてが語り尽くされるということはないでしょうし、それらはわれわれの理解に影響をもたらす幾つかの要因にすぎません。そしてわたしの見解は飽くまでも個人的なものであるということ、それが強調されていいでしょう。

ここで取り上げます治療セッションのマテリアルは、アンドリューのものです。6歳の男児です。セッションの内容に至る前に、これ以前の状況について少し触れておきましょう。このセッションの2週間前、アンドリューは風邪を引いてセッションはキャンセルされました。次の週にセッションに訪れたとき、彼は紙製の‘時計’を作りました。丸い形の置き時計です。そしてその時計盤の大きな針と小さな針を操作しながら、‘彼の時間’が‘セラピストの(腕時計の)時間’と一致していることがとても重要なだと頻りに強調しました。さらに彼は、‘ビンゴゲーム’に取り掛かります。まず二手に分かれて彼とセラピストの前に‘細長い紙きれ(strip)’が並べられました。それぞれに数字が書かれてあります。彼の側の‘プレートカード’に出た数字が彼女の指差す‘ビンゴカード’の数字と完全に一致していれば、彼女の得点になるわけです。彼はいかにも調子づいてはしゃいでおります。意欲満々に遊戯に臨みます。‘ビンゴ’でいっぱい賞金を稼ぐつもりでおります。一方で、このセッションと次のセッションにおいて、彼はダディとマミーについて愚痴をどっさり語っております。

さて、事情はこんなふうでありました。まず失われたセッション(1976/10/01)があり、その翌週(10/08)にはこんなふうに反応したということになります、さらに翌々週にあたるセッション(10/15)に於いてはどのようであったのか、より詳細にみてまいりましょう。

このセッションでは、彼は待合室でマミー(母親)にくじゃあね・・・とグッドバイのキスをします。セラピストの近付いてくる足音が聞こえたので、すぐさま彼女と一緒にになれるようにというわけです。プレイルームに入室しますと、机の上の彼専用の玩具箱に向かい、すぐさま自分が作った紙の‘置き時計’に‘破れ目’があることを知ります。すぐさま彼は、‘ダディ(父親)’がそれをやったんだと言います。彼は、自分の時計がセラピストのと同じじゃなくてはならないということを改めて強調します。どちらも万が一壊れていて時間が止まってしまっているはいけないという意味であります。二人共が間違いなくセッションを見逃さず、また一緒にになれるということこそ肝腎なのですから・・・それでセラピストは、彼の‘置き時計’をちゃんと保管しておかなかったということで咎められてもいるわけです。

ここで彼は前回やっていた‘ビンゴゲーム’に戻ります。すべてを彼は掌握しており、すべてを機能させております。彼に言われたとおりに、セラピストは自分の‘ビンゴカード’の上に指を置きます。彼は自分の手持ちの‘プレートカード’を動かす仕草をします。(‘ビンゴマシン’のつもりでしょうか。)その数字の書かれてある紙切れをテーブルの上でクルクル回して動かし、それが止まったときに、もう一方の紙切れ、すなわちセラピストの‘ビンゴカード’の彼女が指差している数字に一致させようとします。そんなふう

彼がうまくやってくれたおかげで、毎回彼女は‘勝ちビンゴ’を手にし、大いに稼ぎまくるわけなのでした！アンドリューはしばらくしてこの「ビンゴゲーム」を終えます。それから‘赤ちゃん人形’を手にし、「ドル・ハウス」の下の階に置きます。そこにバリケードを設け、そして＜誰も来ちゃいけないんだ＞と言います。セラピストはここで、その赤ちゃん人形が彼であり、ダディもしくは‘他の赤ちゃんたち’が、マミーの‘内側’の良い食べ物を狙っていて、つまり「アンドリュー赤ちゃん」からそれらを横取りするのではないかと恐れているといったことを語ります。つまり、それがどうして‘赤ちゃん人形’の周りに彼がバリケードを張り巡らさねばならなかったのかの理由なのだ、と解釈したわけです。すると、アンドリューはすばやく窓の方へと近寄り、そして裏庭に水溜りを見つけます。そして地面をじっくりと注意して眺めております。＜誰か窓から忍び込んで来はしないかどうか見なくちゃね…。もしそうならば足跡があるだろう…。＞と言います。彼はどうやら足跡がないと見て、安堵しました。彼は電話のダイヤルに注目します。それからセラピストの腕時計に目を遣り、新しい時計だねと言います。彼はここでフットボールをこしらえ、それですばしそのボールを一蹴ります。オモチャのロッカーを目掛けて、それをゴールにします。

この時点で、窓の外に作業員らの物音が聞えました。アンドリューは窓に近寄り、彼らが何を言っているのか真剣に耳を傾けます。彼らはいなくなります。そしてその一人を指差して、＜ほらね、あのひと見てよ…。＞と言い、＜フン、ぼくはスティーブ・オースティンだぞ…。＞とちょっと威嚇的なポーズをします。「スティーブ・オースティン」とは、わたしが知るところでは、人気テレビ・ドラマに登場するサイボーグ改造人間で、スーパーマン的キャラクターなわけです。アンドリューは窓側に立ち、スティーブ・オースティンがよくするようにレンガの壁をも砕くほどのパンチ力をイメージして、両手を身構えます。それから彼は、紙でコップもしくは大きな‘ワイン瓶’をつくります。それを空中に投げたり拾ったりして、やがて「スパイダーマン」が登場します。彼はそのスパイダーマンと同一化し、掌から蜘蛛の糸のような‘縄’が飛び出してくるといった得意技を演じて見せます。ここでそろそろセッションの終わりになろうとしております。彼は紙で‘メジャー（寸法を測るものさし）’を作りました。そのメジャーで彼は自分の背の高さ、頭、そして首、そしてお腹周りを測ります。そしてセラピストのお腹周りも…。最後に彼は、マミーに手紙を書きたいと言います。そして、彼女に手渡す封筒の上に自分の名前を書き記します。

さて、上記したこれらは単なるマテリアル(資料)ということになります。事実が列挙されているだけで、そこには声音とか、姿態、筋肉の緊張の程度とか、子ども患者の動作がいかなる性質のものであったのかなど、それらの手掛かりはまるで見当たりません。つまりのところ、これまでのところ、そこには何ら「非言語的コミュニケーション」といった手掛かりをわれわれは奪われていることになります。それはまた、治療状況を知る上で不可欠な「逆転移 the counter transference」というものによってさほどは影響されずに済んでいるともいえましょう。

われわれがここで試みようとすることは、アンドリューの心が本来目指しているものとは何(what)であるのか、そして彼はどうして(why)そしていかにして(how)そのように考えるに至ったのか、それらを理解することであります。すなわち事実、遊戯のマテリアルとは、すべてそれに尽きるのでありますから…。

次に起こるべきこととは、マテリアルが関連付けられ、そして全体が何らかの‘筋’のあるものとして見えてくるということでしょう。しかしながら、サイコセラピイのセッション中では必ずしもそのとおりになるとは限りません。むしろ大概のところ、セラピストはセッションの中で2つ、3つ程の事柄を同時にそこそこ理解し得たものと感じるでしょうし、それらを解釈して伝えることもできるわけです。それぞれをわずかなりとも関連づけて感知することができましょうし、もしくは全体としても把握できることもありましょう。一方で、理解し得ないマテリアルをあれもこれもとたくさん手付かずのまま残しながら…。ここで肝腎なのは、ややもすれば理解しようとしがちですが、それを敢えてしないということになります。それを躍起になって追いかけてやうとしても、それを手にすることはないでしょう。われわれは「理解できないこと」に耐えなくてはなりません。「待つこと」です。そうすれば、やがてそれ（理解）は向こうからやってくるでしょうし、いずれどうにかそれを解釈のうで活用できることにもなりましょう。われわれは、セッションの後に逐語録的にその記録を書き留めます。そうすることで、セッション中には見えなかった事柄が色々見えてまいります。さらにはもしも「症例」をまとめようとします際など、もしくは唯一つのセッションだけでもいいのですが、さらにもっといろいろなことが見えてくるはずであります。

勿論のこと、われわれは可能な限り明快にことの真偽を理解したいと願うわけですし、そしてわれわれが理解したところを明快に、それら解釈の必要があると感じられた事柄を、待たずとも逸早く伝えたいとも思うわけであります。しかしながら、どれくらい解釈をするか、それら回数によってわれわれの仕事の価値が決まるわけでもないわけですし、むしろわれわれが語る解釈がどのくらい正確なのかということ、またその質（クオリティー）が問題にされるのであります。さらには、解釈をしなくてはといった己のニーズに促されるとか、もしくはそうした何らかのプレッシャーがあるとか、もしくはそれで焦って解釈をしてしまうといったことも間違っております。われわれが正しいと覚えるところの解釈をしようとするならば、常にそこに至るまで待つことに耐えられるということが大事になりましょう。

われわれにとって、「語られる解釈 our spoken interpretations」のみが‘治療の道具 therapeutic tools’とは言えません。セラピストのパーソナリティこそ、子ども患者にマテリアルを生みだすのを可能にさせるものでありまして、それはすなわち、子ども患者の空想生活 fantasy life への感受性、そして興味・関心といった事実依るものであります。そうしたことがセッション中一貫してセラピスト個人の注意力 individual attention によって強化されるといいでしょう。この場合の注意力 attentionというのは、おそらく子ども患者に親たちが与えることが出来る以上の何かであります。同じようにもしも彼らが子どもに規則的に週1回、2回もしくは3回といったふうに50分という時間枠でしっかり注意を注ぐことができるとすればの話ですが…。と申しますのは、こうしたセラピストの注意力のお蔭で、子どもはその空想生活 fantasy life をいっそうのこと存分に花開かせ、己の問題への解決の糸口を見出す努力にさらなる拍車がかかることになるわけです。そして、これら解決の糸口やらさまざまな空想が子どもの心のより表面へともたらされ、そしてそれらが、絶えず側にいてくれる、受容的かつ理解しようとの姿勢の備わった大人の誰かとしてのセラピストに関係づけられ結び付けられてゆくという事実、これこそが治療状況そのものだからであります。

しかしながら、われわれの子ども患者のパーソナリティの奥深くに潜む‘分割排除された部分’を回収するのは、分析の特別な技術があって初めて成功するものであるともいえそうです。そこで解釈が重要となるわけです。しかしそれら解釈のどれか一つのみが絶対の決め手となるはずもありません。それが治療的であるかもしくは破壊的であるかいずれにしても…。解釈とは、そもそも万能感的な‘ペニス’とか‘オッパイ’といった働きをするものでは毛頭ないわけであります。たとえセラピストの中の‘小さな男の子’もしくは‘女の子’が密かにそれを願ったとしても…。或いは、それは原子爆弾の引き金 fuse になって、とんでもない惨事を惹き起こすとも言えませんでしょ。どんなに正しい解釈であっても、それは何度も何度も繰り返されねばならないのであります。そうであってこそ、さまざまに異なったレベルでそれらがワークスルー(work-through)されてゆくわけなのですから。そして間違った解釈の場合には、いずれほどなくそれが間違だったということが解ってまいりますから、それで大概のところ、それら誤まりを認め、そして訂正を試みることにしましょう。もう一つ、われわれが心に銘記しておかねばならないことは、或る一つの解釈に至るとして、それが充分はつきりするためには幾つかセッションを重ねる必要があるということです。さてこうしたことを語ったうえで、われわれはアンドリューのセッションでもたらされたマテリアルの理解へと戻ってまいります。

最初にここで注目されますことは、セッション開始前のアンドリューの待合室での振る舞いです。子どもがごく自然に母親を愛するというのはとてもハッピーで、それが喜びでないわけはありません。そして息子にどのように愛するかを教えること、それは言うなれば母親の役割の一つであります。ところが、どうやらここでの印象はそれとは違うようであります。彼がそのような行為へと駆り立てられたのは、その後の「シークエンス sequence」及び「コンテキスト context」を見てみますと、むしろアンドリューがまず母親を先に宥め^{なだ}すかしておかないと、母親を残してセラピストに合流できないといったことが示唆されているようであります。なぜなら彼にしてみれば、彼を愛してくれる母親のままであって欲しいわけです。だからもしもそれにいくらか懐疑的であるとしたら、彼はセラピストと一緒に勇んでセッションに赴くことを制御することになるでしょう。ここで意味されることは、彼が母親の嫉妬心を恐れているということでもあります。彼が自らのそれを投影したのか、それで彼女を同様な状況においてそのように判断したからか、もしくは彼女が事実嫉妬しているか、もしくはそのどちらでもあるのかも知れません。このマテリアルの意味するところは、週ごとのセッションの間にセラピストから遠ざかっていた間にも、彼が自らのこころの内に彼女を維持していたことを示しております。

さて、勿論のこと、待合室からプレイルームへと移動する間に、こうしたわれわれの脳裏をかすめた考えのすべてをはっきり意識しているわけではありません。ただそれを感じている(feeling)だけと言っていいでしょう。われわれはそれを解釈しませんし、むしろそれを回避します。プレイルームでセッションが始まるまではともかくも…。なぜ解釈しないかと申しますと、そうしますと、われわれの子ども患者らは転移およびセッションを病院の他の領域へ拡げすぎてしまうことになるからです。分析は治療室に限るべきだからです。また解釈をしないのは、セッションのなかで起こることだけでも充分盛りだくさんで、何もかも解釈するなど極めて不可能だからという理由です。われわれの子ども患者は目まぐるしいほどに多くのことを

体験し、さまざまなマテリアルをわれわれに提示しますわけで、われわれにはそれらすべてを考える時間などさほどあるとは言えないからであります。

さて、プレイルームに入るやいなや、アンドリューはすぐさま彼専用の玩具箱に向かいます。そしてそこで彼の作った紙製の「置き時計」に「破れ目」があるのを目にします。それを手にして修繕しながら、彼はそれを壊したのはダディに違いないと文句を言います。「置き時計」は彼自身の一部分です。彼の性器もしくは彼自身の赤ちゃんの部分であり、それを彼は自分専用の「箱」のなかにしまっていたわけです。すなわちそれは、「マミー/セラピスト」が宝もの・赤ちゃんらを抱え持つところの場所ともいえましょう。失われたセッションの間に彼が彼女から切り離されていたように、それが彼女から切り離されないようにしっかりと抱えられるためにも、その「内側」に留まっていなくてはならなかったのです。そして、このマテリアルは、そして次のものですが、前のセッションすなわち失われたセッションに直接言及されてもいるわけですが、彼はまたダディのせいにはしているわけです。しかし彼はダディのせいだと言いながら、でも同時にMiss Yamagamiの「夫」なるひとのことを語っております。ここでは彼は、Miss Yamagami をマミーとして捉えていると同時に、ダディをそのように捉えてもいることになります。すなわち彼は、事実「マミー/セラピスト」を我が物にせんとすること、そして他の全てのライバルを排除せんとするといった彼の敵意ある願望を、ここで彼女の「夫」、すなわちダディに投影し、彼女から自分を切り離してしまう誰かとして、その咎めを彼に負わせようとしているわけです。失われたセッション、その失って戻らない時間と同様に、今や彼の置き時計は壊れていて「止まったまま」だということが判明しますと、現実の父親との関係性においても、現実の母親との間で彼が彼女から引き裂かれることがあれば何時もそうなのですが、彼としてはすべてそれがダディのせいだと感じるわけなのです。彼の時間がセラピストのそれとまったく一致していなくてはならないと彼が主張するのは、すなわち彼の時間、彼の人生、そして彼自身が彼女と一致しており、つまりのところ二人は決して引き離されることがあってはならないということでしょう。ここで彼が、自分の時間を彼女に適応させるべくところを砕くさまが見て取れます。そして彼は、その安全であるはずの「セラピスト/マミー」の「内側」に託してあった彼および彼の物をしっかりと保管してくれていなかったということで、彼女を責めてもいるわけであります。

マテリアルは引き続き、「ビンゴゲーム」へと移るわけですが、同様なことが起きているようであります。しかしこの場合は、むしろもっと操作的でかつ万能感的といえましょう。セラピストが自分の「ビンゴカード」の数字を指差します。彼は手持ちの「プレートカード」とそれが一致するようにコントロールします。すなわち言うなれば、彼の時間と彼女のそれが、彼の数字と彼女のそれとが、つまり彼と彼女がということですが、完全に一致するということになりましょう。そうであればこそ彼は彼女を失うということがないわけですし、またセッションが無いなどということもあり得ないことになりましょう。彼女の協力をさらに得るためにも、彼は事のすべてをうまく図って、彼女がたくさんのお金を「ビンゴ」で稼げるようにしたわけであります。でもここには、残念ながら、彼が彼女の愛を、そしてその協力をも「釣る buy」ものと感じていることが示唆されております。結局のところ、そんなふうに事はうまく運ばないようです。なぜなら愛とは、自由に与えられるものであって、そうでなければ何の意味もないものだからです。誰かから愛を与えら

れ、それが所詮‘金で釣ったもの’だと感じられるとしたら、むしろ不信の念を抱くでしょうし、そしてそうした疑念はせつかく与えられたものの価値を台無しにしてしまうでしょう。セッションの始まる前に、アンドリューが待合室で母親にキスをしたのには、これと似たものを感じさせます。彼がセラピストに合流し彼女のもとを去るときに、憎悪されないためにも、またその愛情および承認を得ようとして、敢えてそのように彼女を‘懐柔’しておく必要があったということではなかろうかと・・。

「ビンゴゲーム」はここで終わりに近付きます。それで彼をある程度のところまで満足させたという印象を受けるわけです。だけどもうやら彼はもっと欲しいという気持ちになったようで、それが遊戯の変わったことに関係しているでしょう。「マミー/セラピスト」をコントロールするため、それが一つでしょう。彼は「赤ちゃんアンドリュー」が決して彼女から離れることがないのを絶対的に確信したいわけです。それで赤ちゃん人形を「ドル・ハウス」の中に置きます。そしてそれから、その辺りにバリケードを築くわけです。誰も中に入れないといったこと。この赤ちゃん人形はアンドリューを表象しているでしょう。そして殊に、彼はマミーを占有する唯一人のひとになりたいというわけなのでしょう。ダディは中に入れないのですし、他の子どもたちにしてもそうです。この「ドル・ハウス」の‘内側 inside’というのは、マミーの‘内側’を表象しているというふうに考えます。それと同じく、プレイルームの‘内側’もそう、もしくは彼専用の‘玩具の箱」、もしくは部屋のなかにあるロッカーの‘内側’だってそういうことになるかと思われます。セラピストは、ダディもしくは‘他の赤ちゃんたち’がマミーの内側にある‘良い食べ物 the good food’を横取りするのではないか、そして赤ちゃんアンドリューから盗むんじゃないかといった彼の恐怖を取り上げて、実にそれがなぜ彼がバリケードを築いてそこに閉じこもったかの理由であろう、と解釈したわけです。

こうした解釈がなされた後、われわれは次に引き続きどのようなことが起こったか、その「シークエンス」を見てまいりましょう。つまり解釈が確認されているかどうか、それがどんな効果をもたらしたかということ。でも、必ずしもいつもそれがそのように展開するとは限らないわけですし、大いに戸惑わせられることだってありましょう。しかし事実、われわれの子ども患者は、＜そう、本当にそのとおり(How right you are)・・＞とすることがあり、彼の空想が解釈のとおりであり、現実とされて、そのように事が進む場合もあります。アンドリューの場合もそうでした。彼はすぐさま窓際に寄り、そして庭のぬかるんだ地面と水溜りを見て、何か人の足跡がないかどうかを確かめます。＜ほらね、誰も忍び込んだ形跡は無いよ＞と、彼は言います。恰もMiss Yamagami は彼の味方であり、それで彼に油断しないようにとわざわざ言ってくれたみたいに・・。それで彼は安堵したふうに室内に気持ちを戻し、そして電話のダイヤルに目を奪われます。それからMiss Yamagamiに、新しい腕時計してるねと言います。わたしは、彼がこんなふうに語っているように思われます。＜ほらね、心配しなくてもいいよね。ダディはやってこないから・・。先生も心配しなくてもいいよ。大丈夫、ぼくがダディの代わりになって、新しい‘ペニス’やら、それに新しい‘赤ちゃん’だってあげることが出来るんだから・・＞と。

ここでセラピストの解釈はこのように正しかったことが確認されたわけですが、しかし彼の空想の無意識的方向性に何らかの変化がもたらされるためには、彼から奪うやら攻撃してくる父親に対して、その恐

怖が一体どこからやってくるのかということをアンドリューに示す必要があったのではなかろうかと思われる。すなわち、彼女の‘夫’とか‘子どもたち’から彼女を奪おうとしているのは、そしてその彼女の内側のすべての良いものを奪おうとしているのは、実に彼自身なのだということ。それにまた同じく、マミーを、それから彼女のすべての良いものをもダディから盗みたいと思っているのは彼なのだということ。彼のこうした‘盗み取ってやりたいフィーリング stealing feelings’を彼女の夫/ダディに押し込んで、そしてその彼はドロボーなんだと言っているわけですが、しかしその彼の恐れるドロボーとは実のところ彼自身だということでもあります。われわれの語る解釈が、子ども患者の反応からその空想内容が確認されているように見えている場合にしろ、そこで事実われわれの解釈が十分に「転移」に根付いたところのものとして取り上げられているかどうか、その上でそのルーツ、すなわちそれがどこから来ているのか、われわれの子ども患者に示すことができているかということを十分に検討してみることが必要となります。

とにかくにも今やアンドリューは彼がダディの座をうまく乗っ取ったと感じているようです。彼はそこでマミーに‘赤ちゃん’を授けようとするようであります。彼は紙で‘フットボール’を作り、それをゴールとしてオモチャのロッカーに向かって蹴ります。さてフットボールのゲームであります、それというのは、マミーの股間のゴール(ポスト)目掛けて小さな何かを蹴り入れることを象徴しているわけであります。そして、そうすることでライバルを打ち負かし勝利に酔うといったことが狙いでしょう。因みに、オモチャのロッカーはしばしば「マミー/セラピスト」の‘内側 inside’を象徴しているわけであります。

ここで遊戯は変わったものの、そこに通底するところの空想は変わっておりません。そして遊戯が変わるとしたら、そこには進行している空想そして行為のごく自然な発展があるとみていいでしょう。確かに、彼はダディの座を奪ったと言えなくもありません。この時点で窓の外から作業員の男たちの声が聞えてきます。アンドリューは窓際に寄り、そして彼らが話していることにジッと耳を澄ましております。どうやら迫害的恐怖を抱き、彼らがアンドリューに対して何やら謀略を企てているように、彼には感じられている感じがわかります。やがて間もなく彼らは去ってゆくわけですが、彼はその一人を指差し、<ほら、あいつ見て・・>と言い、それから<フン！ぼくは‘スティーブ・オースティン’だぞ！>とこれ見よがしに威嚇的なポーズをしてみせたのです。スティーブ・オースティンとは、わたしが知る限りでは、テレビに登場するサイボーグ人間で万能感的スーパーマンといったキャラクターであります。二人の作業員、それはダディかもしくはセラピストの‘夫’を表象していると思われますが、彼らが窓の外に姿を現したことで惹き起こされた不安に直面し、アンドリューは己の‘万能感’という防衛を強化し、さらにそれで自らの無力感の否認を強化したというわけでしょう。そして彼が彼らを追い払ったのだと敢えて誇示せんとするのに、‘スティーブ・オースティン・スーパーマン’になりすまし、窓際に立ち、その窓ガラスの向こうに居る相手にパンチをくらわせたつもりになるといったことのようにです。

或る意味で彼は、マミーとその赤ちゃんを庇護するところの強いダディなわけです。しかしそれは飽くまでも盗んだものであり、そして魔術的な万能感および躁的否認によって獲得されたものでしかありません。そして彼自身の‘赤ちゃんの部分’は、「マミー/セラピスト」に投影されていて、その‘内側の赤ちゃん’

になってるわけであります。しかしアンドリューの‘小さな男の子の部分’が、それ自身ダディの座を奪わんとしてその逞しき父親へと投影されますと、すぐさま彼はこの小さな男の子の内に取り込まれ支配された父親を‘再摂り入れ re-introject’しますから、その挙句男の子そっくりとなった父親そのままを振る舞うことになるのです。ここで彼は、紙で‘フラゴン(瓶)’を作ります。もしくは‘コップ・オッパイ’というわけでしょう。それを勝ち誇ったふうに手の中でポンポン投げます。つまりは、<ぼくはもう赤ちゃんじゃない。ダディなんだ。ぼくは何だって出来るんだ。もう「マミー・オッパイ」は要らないよ・・・>と言わんばかりに・・・。

ここでマテリアルはちょっと難しくなってまいりますので、ちゃんと筋が通るような理解を得たかどうかわたしとしても定かではありません。たぶんセッションの時間の終わりが近付いてきているために、アンドリューはちょっと焦っていたとも思われます。しかしながら、それが何らかの物語の一部かも知れず、まだこの続きがあるのかどうか、わたしには判然としません。ただ言えることは、どうにも彼は一つのことから別のことへとかなりすばやく考えを転換していくようです。それはセッションの終わりまでそうであります。とにもかくにも、ここで彼は今や‘スパイダーマン(蜘蛛男)’^{くもおとこ}になっているわけです。それは妖術でもってどこでだって‘蜘蛛の糸’を張り巡らすことができ、だからどこにだって自在に忍び込んでゆけるし、もしもいざという時危なくなれば、どんなふうにだって逃げられるといったことのようにあります。

たぶん彼は、この少し前に彼が勝ち誇った気分でいたのは、ちょっとやり過ぎたと思ったのかも知れません。それで、ここに至って己の万能感に対しての過剰な自信をちょっと抑えぎみにし始めたということでもありましょう。もしくは、おそらく母親に対する彼の愛情に気付いて、それで迫害的な罪障感が生じたということもあり得ましょう。しかしさらにもっと言えば、たぶんもうすぐセッションの終わりだということが頭を掠めたのであったかも知れません。セッションが終わりになる少し前、彼は紙で「メジャー(寸法を測るもの)」を作りました。それで彼の背丈、手やら首周り、それからセラピストのお腹周りそして自分のそれをも測ります。セッションが終わりになることで「分離不安」が生じてまいります。そしてアンドリューは、確かに自分自身とセラピストを比べ始めていたわけであります。彼自らの背丈などを測るということは、自分が誰であり何であるのかをはっきりさせなくてはならないといったことではないかと思われまします。どのくらい自分はスーパーマンだって言えるのか？自分は誰？自分は「マミー/セラピスト」のようなの？マミーなのかな、ダディなのかな、男の子なのかな、女の子なのかな？それで、セラピストは他の赤ちゃんと自分を取替えるつもりなんだろうか・・・とか。こうして彼の内に惹き起こされた不安に反応しながらも、どうやらそれらは現実において吟味されてゆくようであります。

彼はここで、「セラピスト・マミー」から実際のマミーへと切り換えねばならないと意識しているようであります。彼は母親とうまくやってゆかねばならないのですから・・・。それで彼は彼女に手紙を書こうとします。そして封筒に自分の名前を書いて、セッションの終わりにはそれを彼女に届けようとしています。こうして彼は、セッションの終わりを強く意識していたと思われます。そして今や異なる現実と直面しなくてはならないということでしょう。つまり、現実のマミーと一緒にいるといった課題にここで気持ちを向けなくてはなりません。わたしは、彼が彼女から離れる際にいくらか不実 disloyal であったことを思えば、それもなか

なかスムーズとはゆかないだろうと思われるのです。彼の懸念というのは、セラピストと一緒にいることにあまりにも自分が熱心であるとしたら、＜この子はなんだ！わたしなんてどうでもいいのね・・・＞と母親は思うだろうということです。彼は「スーパーマン・ダディ」との同一化から降りて、ここでもう一度普段のアンドリューになるわけです。彼の「転移」はおそらく、概してセラピストの部屋そしてセラピスト自身により収斂されているともいえましょう。こうしてそれらは、彼女との関わりに於いて‘ワーク・スルー’されてゆくのであって、家庭内でアクティングアウトされることはむしろ少なくなるでしょう。もしそういうことであれば、家庭内ではおそらく事態はもっと円滑になってゆくものと期待されるわけであります。しかしながら、どうやら彼は、自分が愛されているのか、そして自分が自分であることを尊重されているのか、まだそこら辺りがはっきりとしないようであります。彼は‘贈り物’を携え、そして彼自身をまた贈り物として母親のもとに戻るわけです。そんなふうにセッションは終わっているようです。

さて、以上の事柄から、何がどうだったと言えればいいのでしょうか？わたしとしましては、まず一つには、失われたセッションが「分離不安」を募らせたということがあったと思われます。それはオッパイ・レベルでもそうですし、性器的レベルでもそうでしょう。そしてこれらはアンドリューにとって苛烈な「エディプス葛藤」といった内容を伴っているようでした。こうしたことに対処すべく彼が取った策とは「投影」であり、そして「万能感的支配」といったことでしょう。例えば彼の時間をセラピストのそれと一致させるといったこともそうでしたが、彼は自らの帳尻を合わせるべく、あれこれ盛んに画策したのでありました。彼は彼女に断然釣り合わそうと大いに努めております。彼が「投影」を用いるのは、盗んだりコントロールしたりといったことだけではありません。そうしたことは、彼が「スティーブ・オースティン・ダディ」との同一化をするときにはそのように見受けられるわけですが、他にも、彼は「投影」を理解しようとして用いていると言っているでしょう。セラピストと彼と一緒にいることを母親がどんなふうに感じるのか、もしくはセラピストをどんなふうにピンゴゲームに誘えばいいのかといったことを理解する際にも「投影」を使っているようであります。そのように、「投影」によって必ずしも失望するばかりとは限りません。それはむしろ彼の知力を拵げてゆくことになりまして、それで彼の困難を解決することに役立っているとも言えそうです。彼は「置き時計」に‘破れ目’が見つかったときも、ただ圧倒されてばかりもいません。工事をする人たちの声を聞いても、もしくはセッションの終わりについても・・・彼の空想に於いて、それこそが母親を独り占めしたいといった彼の願望を解決するための方便であったわけですが、彼はさまざまに、かつ複雑に入り組んだ象徴 symbolization を用いております。そして、どうやら彼は、同時に彼のこころのうちで異なったレベルで異なったタイプの解決法を幾つもあれこれ引き出そうとしているように思われます。ここでの象徴 the symbols は‘複数の要因によって惹き起こされる overdetermined’ ようであります。例えば、時計は、彼の性器そして赤ちゃんとしての彼自身をも表象しているとも見えましょう。セッションの始めには、彼は自分の問題を解決するのに、どうやら物理 physics を援用したとも言えます。つまりは空間/時間の概念を取り込んで、それで時計づくりとかピンゴマシンの製造に取り組んだというわけです。そして最後に彼が紙製の「メジャー」を使ったということは、どうやら彼の初歩的な科学的学習を物語っているかのようであります。アンドリューは、とても興味深い子どもです。とても繊細な sensitive 感受性の備わった子どもに思われます。しかしながら、彼は自らの価値(値打ち)というものの、そして彼の愛する能力には

大いに疑いがあるように見受けられます。彼には愛を‘釣る buy’ものだと思っている節があります。セッションの始まりに母親にさよならのキスをするとか、セラピストに「ビンゴ」で勝たせようとしたり、それから終わりには母親にわざわざ贈り物を用意しなくちゃといった気持ちになったことに、それがうかがわれます。それらの原因が何であれ、その一つとして確かと思われることは、‘内的対象’を巡って、それを是が非でもコントロールせんとしたり、そこに秘められたありったけのものを略奪せんとしたりといった彼の攻撃性に起因しているということでもあります。それは、彼の占有欲および貪欲さが引き金となっているわけですが…。こうした攻撃性が分析されてゆくにつれ、彼の「投影」も、その攻撃性も、そして万能感も緩和されてゆくものと思われます。それでアンドリューの己自身への自己信頼は伸びてゆくでしょうから、自らの価値(値打ち his own value)を過小評価することは、それだけ少なくなってゆくものと思われます。‘自己の値打ち’を知らないということ、それで人の愛は‘釣る’ことでしか得られないと感じたりするのは、多くの盗人たちの背景にある心的メカニズムといえましょう。それは「ロビン・フッド」にしろそうでしょうし、学校で友だちをそのように(物やら金で)‘釣る’ことをしたりする子どももそうでしょう。それにまた政治家にしろ、それはそうかも知れません。さまざまな手段を講じて、投票権を‘買おうとする’といったふうに…。アンドリューについては、その萌芽的なものを見る思いがいたします。

以上のように、アンドリューの唯一回限りのセッションに深く分け入って、そこで何が起きているのかあれこれ思索を掘り下げてみました。脳裏に幾つか疑問が浮かびますし、それで行きつ戻りつしながら、そして子ども患者の遊戯そして行動がどう変わってゆくのか、その変容をしっかりと見据えながら…でありました。そうすることで、われわれは子ども患者それぞれから数多くの‘学び’を得られるのであります。そして疑問が残ったり、まだまだ不鮮明に思うところがあれば、いつしかこの症例の続きで、もしくは他の症例においてでもいいでしょうが、さらなる理解を得ようとわれわれは意欲してゆくことになりましょう。

このマテリアルをご覧になって、誰もひどく驚かれるでしょう。これをMiss Yamagamiに提示されたとき、わたしがまさにそうでした。とても魅力的なマテリアルと思われました。わたしが随分昔、「タヴィストック」の訓練生でいたときのことが思い出されました。ご一緒した皆さん方の顔が浮かびますが、とても優秀な人たちがおられました。彼らが提出する症例のマテリアルがほんとにすばらしかったのです。それぞれに実にオリジナルであり、きちんと筋立てされているだけではなく、またそれぞれの見解が実に明快で、しかもシンプルであったからです。そして、間もなくそれは単なる‘運 luck’だけの問題ではないということに気付かされたのです。すなわち、それは彼らそれぞれのセラピストとしての資質と分析的な技量によるということが理解されたのです。ここでわたしは、Miss Yamagamiに、このマテリアルをわたしに提供して下さったことに深く感謝したい。

John Bremner
(Senior Psychotherapist
St. George's Hospital)